

特 62
110

世 範

耶蘇降生一千八百九十九年

明治三十二年十二月

英國聖公會布教會社



完

故監督アトワートビカステス序文
トマスア.カンピム氏原著
本地方監督神學博士三島義校閱

松田美久
三島 彊 訳速刪正

序
今茲ニ日本ノ衣裳ヲ粧ヒタ麗此小冊子ノ原著者曰
十五世紀ノ始メ同栖兄弟會ノ隱士トヤヌアケシビ
氏ヲリ本書ハ近頃マテ何人ノ手ニ成リシヤノ疑
ヲ懷キ之ヲ批難スルモノモ多カリシカ今全クケ
シビス氏ノ著述タルコト明瞭セリ
氏ガ生涯ノ事蹟ニ付キ世ニ知ラレタル所ハ僅カニ
數言ヲ以テ之ヲ明ニ記スルコトヲ得ヘシ氏ハ頃キ
三百八十年和蘭オランダ市ニ生ル父ハ金銀工ヲ業
下ナシ常ニ正直勉強忍耐及ビ質素ヲ模範ヲ以テ美

ニ視セリ母ハ他ノ諸聖賢ノ母ノ如ク秀群ノ敬虔者
 ニシテ大ニカヲ氏カ幼時ノ教育ニ致セリ氏ノ始メ
 文學ヲ修メタルハ氏ノ後年屬隸シタル同栖兄弟會
 ノ校舍ニシテ其學ヒタル學科及ヒ授業法ノ精良た
 ルハ當時尋常學校ノ外ニ出テタリト云フ抑モ此會
 ノ規律ハ之ヲ他隱士ノ遵守スヘキモノニ比スレハ
 稍々寛裕ナリト雖モ其定意ハ專ラ克己ヲ重ンシ惟
 一ニ靈ノ上達ヲ以テシ又大ニ青年ノ教育ト其地方
 庶人ノ靈命ヲ進ムルコトニ盡力セリ氏ハ一千四百
 六年此會ノ會員トナリ一千四百十四年長老ノ聖職
コレスゴテロ

ヲ受ク其後教會ニ關スル難事起リ會員姑ラク四方
 ニ離散スルトキノ外氏ハ其故園ニ遠カラサルゾヲ
 レ一邑ノ近傍ナル聖アグチス院ニ在リ怡然トシテ
 其壽ヲ保テリ氏ハ其職ニ在ルヤ常ニ説教ヲ怠ラズ
 會員ノ干與スル善業ニ從事シ又會ノ各要務ヲ帶フ
 ルト雖モ專ラカヲ文學ニ致セリ氏ハ浩翰ナル「ラテ
 シ」語ノ聖書ヲ全ク抄寫シテ更ニ之ヲ四大卷ニ分テ
 リ此業實ニ十五年ノ長キ星霜ヲ歷タリト云フ此他
 氏ハ會員ノ義務ト靈ノ生活ヲ修養スルトニ關シ小
 冊子ノ聯篇ヲ編纂セシモノ鈔カラス氏ハ終始此ニ

從事シ遂ニ九十一ノ高齡ヲ以テ聖雅各ノ祝日ニ永眠セリ舊記ニ云日終祈禱ノ後ナリト

氏ノ著書中基督ニ倣之事世範ト題スルモノハ氏カ在世々紀終ヲサルノ前既ニ著名ノ書トナリタリ爾來數多ノ方言ニ譯セラレ又幾多熱心信徒ノ多クハ事實相異ル所アルニモ拘ラス皆愛讀賞賛シテ之ヲ伴侶トナセリ而シテ人普ク之ヲ證シテ曰ク若シ夫レ讀者神ノ恩佑ヲ受ケテ之ニ熟習セハ己ヲシテ深ク神ニ親和セシムルニ至ルヤ必然ナリト宜ナル哉基督教ヲ奉セサルノ人ト雖モ本書ノ美妙ナルハ之

ヲ證シテ各マサルコトヤ抑モ本書以和譯ハ今日ヲ以テ始トナスニテラス今ヲ距ルニト三百年前本邦在留ノ宣教師既ニ之ヲ翻譯モシモ惜哉羅馬字ヲ以テ印行セルニヨリ廣世間ニ傳播主サルモノト見ユ今ヤ再ヒ之ヲ譯シテ世ニ公ニス是レ猶本書ノ西洋諸國ニ於ケルカ如ク東洋ノ本土ニ在テモ亦同シク神ノ爲ニ盡ス所アルヲ冀フニ因テナリ讀者若シ本書ヲ以テ唯敬虔的書冊ノ妙作トナシ又以テ信徒ノ靈魂ヲ進ムルカ爲メ基督教勢力ノ顯著ナル證トナスニ止マラスシテ本書

載スル所ノ勸言教規ノ補助ヲ得基督カ其言行ヲ以テ弟子ヲ爲ニ制定セラレタル完全ノ標準ニ益親和スルヲ努ムルアラハ則チ本書ハ此國ニ於テ又大ニ神ノ爲ニ善キ働キヲ爲スノ冊子トナルヘキナリ請フ本書ヲ讀マシムルノ諸氏ハ先ツ祈禱ヲナシ以テ徐ク之ヲ緘ケ今ヤ眸ヲ洋ノ東西ニ放チテ人々ノ生路ヲ視ルニ迅速是レ貴ヒ憤怨是レ行フ此時ニ當リ之ヲ弊風ヲ一掃スルハ其レ遼遠ナル修道院ノ幽窟ニ出テタル言語ヲ研究スルニアル歟

茲ニ附記スヘキモノニアリ

(一) 諸氏ハ本書ヲ通讀スルニ方リ十五世紀中當時ノ事情ト其諸説ニ誤謬アルトヲ見シ然レトモ譯者ハ漫リニ其枝葉ヲ芟ラス悉ク之ヲ存置セリ蓋シ好古ノ士ハ之ヲ削除スルヲ欲セス又教理ニ通曉スルニ信徒ハ爲ニ迷津ノ恐レアラサレハナリ

(二) 本書ノ要ハ各自一個ノ内心内生ノ進歩ヲ計リ其真理ヲ解説指命スルニアルナリ願フニ此事ニ係ル信徒ヲ著作中此書ノ右ニ出ルモヲ蓋シ之レアラサレハシ然レトモ家族朋友教會及ヒ國家ニ對スル義務如何ヲ説クモノ極メテ僅少ナリ是皆本書ノ範

國外に於ルヲ以テナリ讀者須ラク記ス各々此書
 新約聖書ノ如ク意義廣潤ナラス又神學若クハ道德
 ヲ教ムル完全ナル書冊ニアラサルヲ以テ其心ヲ
 願クテ神恩惠ヲ垂レ譯者多少ノ勞苦ヲ積ミテ本
 書ニ據リ幾多ノ日本信徒ヲシテ克ク基督ニ模倣シ
 基督ノ心ヲ以テ其心トナサシメ給ハンコトヲ
 古ノ一千八百九十一年第二月三日
 在日東京
 監督
 一
 二

一 緒の言
 本書の初版は譯者見る所ありて第一、第四の卷の譯
 を以て一部となして出版したりしが其第三、三卷漸
 譯述の功程を了りたるにより初版に於る約を履
 必四卷全部を完束したる譯書となして之を世に公
 にするの時機を得たり此時に當り讀者諸氏に一言
 すべきことあり余が淺學非才なると終始執務の多
 端なるにより充全の校閱刪正を施すの餘閒を得ざ
 るより其譯述する所の意旨或は原著者の真意を悉
 げと能はざりし所もあらんか或は又誤譯遺漏の

句節等おかりて正しく江湖の屬望に背くことあらんを恐る然れども初版以來既に多くの日子を経たるを以て更に充全完美なる譯書となすの餘裕あらざることを悟り茲に之を公にすることとなしたり讀者諸氏は能く此意を諒せられんことを余は本書の譯者に就き全牀の責を負ふと雖も翻譯劇修の勞は松田承久、三島彊の兩氏を主とし其他諸名士の執られし所なれば讀者は大に該諸氏の勞を謝せられんことを望む

第一、第四の卷は文牀上多少の修正をなしたる所あり

り且初版の際讀者の希望に基き本版には悉く平假名の傍訓を附したり此れ或は讀者に一層の便益を與へ又廣く本書の世に行はるゝ媒介たらんことを信ず

初版に述し如く本書が幾多の國語に譯され又神の道に付き大に異りたる意見を持せる人士の悉く之を愛讀し本書の名の世に隠れなきは神の本書を用ひしめ玉ふ所なれば本著も亦神の祝福により是日本國に於て信仰の彌々増し加はり愛の心旺盛になん幾多人士の心に眞の敬虔清淨の精神を起すの

一助となりんことは譯者の祈りて止まざる所なり
 本は西千八百九十九年十二月三日に於て出版されし
 此の書は元來其の對本邦を以て書せられたる識見日
 を發露し本邦の首の世を諷刺するものなり其の本邦を以
 て諷刺するものなり其の意旨を察する人士の悉く之
 時難く然し斯う本邦の前途の憂を以て其及幅の
 闊きを以て其の意旨を察する人士の悉く之
 與へて其の本邦の前途の憂を以て其及幅の
 闊きを以て其の意旨を察する人士の悉く之
 且時運の衰微を以て其の意旨を察する人士の悉く之

世の益例と言ふことなき其の意旨を察する人士の悉く之
 本書はトマス、マケンヒス氏所著の基督に倣ふ事と
 題する小冊子の羅旬語を以て書したるものと一千
 八百八十八年英國にて反譯せしものを基礎とし且
 前年日本に在留せし英國人ライト氏の久々苦辛し
 て草せし和譯の稿本を參酌して譯述せしものなり
 本書の譯述結了の上はケンヒス氏の略傳并に此書
 の傳來等に付き更に序述する處あらんとせしが監
 督ヒカステス氏は此反譯の美舉なるを贊し右に載
 せたる頗る此書に有益なる序文を草して寄せられ

たり氏の序文は即ち譯者が已に期したるケシハ不
 氏の事歴并に此書の由來等簡にして能く其事實を
 擧げられたるを以て譯者は其惠によりて更に之を
 序述するの勞を省きたり然れども本書譯述の次序
 并に文中一二の事項は讀者に必用なるが故に聊か
 茲に辨せんとす
 此書は意旨深重にして多くの甘味を含有するが故
 に之を譯述するに際し若し其語言を誤り從て本旨
 を轉換することもあれば大に原著者の深意を傷け且
 世に益なからんことを恐れ其譯文の結構并に句中

の熟字等頗る謹みを加へ可成的原文に適切なるも
 のを採用し漫りに文飾して冗辭を加へざるが故に
 行文或は流暢ならざる所なきにあらざれども讀者
 宜しく譯者の用意を諒し徒らに行文の拙劣を以て
 之が批評を下すこと勿れ

此原書は第一より第四卷に至りて完く一部の冊子
 となりたるものなり然れども其記述の顛末を閱す
 れば其第二第三の兩卷は靈魂の生命を保持する正
 に付僅かの區別あるまでにて粗第一卷に同じきも
 のなれども第四卷に至ては完く之と異りて専ら主

基督の設け給ひし聖餐を守るに緊要なる事項を掲げたるものなり今吾人の取て以て最も有益なるは第一第四の兩卷に在りとす故に譯者は殊更に其順序を轉じて譯出し以て之を一部の書冊に構成せし其第三第三兩卷の譯述は姑く之を他日の業に付す」
 文中修道院と書するものは本書の原文著述の當時に現存せし精舎の名にして恰も日本の寺院の如きものなり又文中に修遣者と書するものは塵俗を離れて此院中に栖息し専ら其道を修業するものにして所謂僧侶と相同じきものなり

各章中の諸節并に引照の標記は一に原著者の定むる所に従ひ更に修正せしものなし又引照の下方に〔羅〕とせしものは其引照の羅句語たるを示したるものなり

此原文の著述は其年代最も古きが故に今日とは完く其事情の同じからざるものあり又其主意に於ても譯者は完く之に信服せしにあらざれば此書の廣く世に行はるるを見れば固より世教に益あるは疑ひを容れざる所なり讀者宜しく此書の妙趣を看破して其益を領すべし

六

本書の譯述己に脱稿するの際同原書の第一第二の兩卷を譯して基督の模範と題する譯書の出るに會ひたり然れども本書は前に述べたる如く其譯出の順序も同じからず從て其牀裁も亦異なる所あるものと信じ茲に之を發刊することとなしたる抑も此書の世に出でし能く行はるゝと否とは一に讀者諸氏の取捨に任ずるのみ

（譯）明治二十五年七月
 各章中の譯述は其原書の第一第二卷の如く

世範全書

目次

世範卷之一

靈魂の生命を保持するの要訓……………一六

第一章 基督に倣ひて世の虚榮を輕んず……………三三

第二章 自己を知りて謙遜すべし……………五

第三章 眞理によりて教訓らるゝ事……………九

第四 行為を戒慎すべき事……………一七

第五 聖書を研究する事……………一九

第六 過度の慾情……………二一

第七 空望と驕傲を避くべき事……………二三

第八 過度の交親を慎むべき事……………二六

第九 從順并に人の支配を受くる事……………二八

第十 多言を慎むべき事……………三一

第十一 平安を求め并に靈魂の上達を熱望する事……………三三

第十二 苦難の益……………三八

第十三 誘惑に敵すべき事……………四〇

第十四 暴議を避くべき事……………四九

第十五 愛によりて行ひたる所爲の事……………五五

第十六 他人の缺點を堪へ忍ぶ事……………五四

第十七 修道院者の事……………五八

第十八 聖列父の龜鑑……………六〇

第十九 善良なる修道者の修行……………六六

第二十 獨居靜黙を愛する事……………七四

第三十一章 心の痛悔……………八三

第三十二章 人類の艱難を思察する事……………八九

第三十三章 死を考想する事……………九七

第三十四章 審判と罪人の刑苦……………一〇六

第三十五章 熱心を以て一生の言行を改換する事……………一五四

第三十六章 熱心な事……………一五五

第三十七章 熱心な事……………一五五

第三十八章 熱心な事……………一五五

第三十九章 熱心な事……………一五五

第四十章 熱心な事……………一五五

第四十一章 熱心な事……………一五五

第四十二章 熱心な事……………一五五

第四十三章 熱心な事……………一五五

第四十四章 熱心な事……………一五五

第四十五章 熱心な事……………一五五

第四十六章 熱心な事……………一五五

第四十七章 熱心な事……………一五五

第四十八章 熱心な事……………一五五

第四十九章 熱心な事……………一五五

第五十章 熱心な事……………一五五

第五十一章 熱心な事……………一五五

第五十二章 熱心な事……………一五五

第五十三章 熱心な事……………一五五

第五十四章 熱心な事……………一五五

第五十五章 熱心な事……………一五五

第五十六章 熱心な事……………一五五

第五十七章 熱心な事……………一五五

第五十八章 熱心な事……………一五五

第五十九章 熱心な事……………一五五

第六十章 熱心な事……………一五五

第六十一章 熱心な事……………一五五

第六十二章 熱心な事……………一五五

第六十三章 熱心な事……………一五五

第六十四章 熱心な事……………一五五

第六十五章 熱心な事……………一五五

第六十六章 熱心な事……………一五五

第六十七章 熱心な事……………一五五

第六十八章 熱心な事……………一五五

第六十九章 熱心な事……………一五五

第七十章 熱心な事……………一五五

第七十一章 熱心な事……………一五五

第七十二章 熱心な事……………一五五

第七十三章 熱心な事……………一五五

第七十四章 熱心な事……………一五五

第七十五章 熱心な事……………一五五

第七十六章 熱心な事……………一五五

第七十七章 熱心な事……………一五五

第七十八章 熱心な事……………一五五

第七十九章 熱心な事……………一五五

第八十章 熱心な事……………一五五

第八十一章 熱心な事……………一五五

第八十二章 熱心な事……………一五五

第八十三章 熱心な事……………一五五

第八十四章 熱心な事……………一五五

第八十五章 熱心な事……………一五五

第八十六章 熱心な事……………一五五

第八十七章 熱心な事……………一五五

第八十八章 熱心な事……………一五五

第八十九章 熱心な事……………一五五

第九十章 熱心な事……………一五五

第九十一章 熱心な事……………一五五

第九十二章 熱心な事……………一五五

第九十三章 熱心な事……………一五五

第九十四章 熱心な事……………一五五

第九十五章 熱心な事……………一五五

第九十六章 熱心な事……………一五五

第九十七章 熱心な事……………一五五

第九十八章 熱心な事……………一五五

第九十九章 熱心な事……………一五五

第一百章 熱心な事……………一五五

世範卷之二

心裏に關する要訓……………四〇

第十二章 内心の生活を傾けしめる事……………一三九

第二章 心を卑くして服従すべき事……………一三三

第三章 善良温和なる人の事……………一四〇

第四章 心情を清潔にし意向を純正にする事……………一四五

第五章 自己を熱察すべき事……………一四八

第十六章 責なき良心より生ずる喜悅の事……………一五一

第十七章 總ての物に念りて耶穌を愛すべき事……………一五八

第十八章 熱心な事……………一五六

第八章 耶穌と厚く親しむ事……………一六〇

第九章 慰藉の缺乏する事……………一六七

第十章 神の恩恵を謝すべき事……………一七六

第十一章 耶蘇の十字架を愛する者寡き事……………一八四

第十二章 聖なる十字架の公道を歩むべき事……………一九一

第十三章 事……………一九九

世範卷之三

心裡に受る慰藉の事……………二〇七

第二章 忠誠なる魂に基督の密語を給ふ……………二〇〇

第三章 事……………二〇七

第二章 眞理聲を出さずして心の中に語……………二六一

第十三章 人多くは神の聖語を重せずとい……………二五八

第十四章 人をも謙遜を以て聞くべき事……………二五三

第四章 誠實と謙遜を以て神の前に世を渡る事……………二五八

第五章 神の慈愛の不思議なる効果を生ずる事……………二四六

第六章 眞實の愛を證徴する事……………二三四

第七章 謙遜を以て主の恩恵を秘蔵する……………二三九

第八章 神の前に己を卑下する事……………二四六

第九章 萬事を神に歸すべし事……………二四九

第十章 世を輕んじ神に事ふるの喜悅し
き事……………二五三

第十一章 心の願望を斟酌制限すべし事……………二五八

第十二章 忍耐の念を生育し私慾と競争ふ……………二六一

第十三章 耶蘇キリストに倣ふて卑賤者の
其上に恭順すべし事……………二六七

第十四章 私徳を驕らざる爲神の隱秘なる……………二七五

第十五章 審判を熟考すべし事……………二七〇

第十六章 凡て我欲ふことに就ての威念及
び言語……………二七四

第十七章 眞正なる安慰は惟神に要むべき……………二八六

第十八章 我等の憂愁は悉く神に任すべし……………二八三

第十九章 我々の憂愁は悉く神に任すべし……………二八三

第二十章 眞正なる安慰は惟神に要むべき……………二八六

第二十一章 審判を熟考すべし事……………二七〇

第二十二章 凡て我欲ふことに就ての威念及
び言語……………二七四

第二十三章 耶蘇キリストに倣ふて卑賤者の
其上に恭順すべし事……………二六七

第二十四章 私徳を驕らざる爲神の隱秘なる……………二七五

第二十五章 審判を熟考すべし事……………二七〇

第二十六章 凡て我欲ふことに就ての威念及
び言語……………二七四

第二十七章 眞正なる安慰は惟神に要むべき……………二八六

第二十八章 我等の憂愁は悉く神に任すべし……………二八三

第十八章 基督の模範に倣ふて此世の辛酸……二八〇

第十九章 忍耐の例證を論ず……二八六

第二十章 自己の孱弱なることを認むべき……二九〇

第二十一章 凡士の善行のみよび凡ての恩物……二九五

第二十二章 神恩の夥多なるを忘るべからざる事……三〇一

第二十三章 心に大なる平和を生ずる四箇の事……三〇九

第二十四章 他人の生命を穿鑿せざる事……三二二

第二十五章 心の確固たる平和と靈の真正なる上進を得る所以……三三八

第二十六章 自由なる心意の秀美なること及び之を得るは讀書によらず熱心……三二一

なる祈禱によること……………三二九

至善を需むるに最も妨げ多き私

愛の事……………三三三

第二十八章 讒者の毒舌に對する事……………三三八

第二十九章 患艱に罹るときは只管神を喚求……………三三三

め且感謝すべき事……………三四〇

第三十章 神の祐助を願ふこと及び恩寵の再收を確く信する事……………三四三

第三十二章 凡ての受造物を輕んじ創造者を

温ぬべき事……………三五〇

第三十二章 自己を棄て凡ての邪慾を去るべき事……………三八三

第三十三章 心の輕浮なること及び終局の志……………三八〇

第三十四章 望を神に向はしむべき事……………三六一

神は己を愛する者の爲には萬物……………三六六

に超ゆる萬事に於て甘美なる事……………三六四

第三十五章 今世に於ては誘惑を避くべき所……………三六二

第三十六章 なる事……………三六八

第三十六章 徒なる人の批評を懼るべからざる事……………三六八

第三十七章 心の自由を得んために完く自己……………三六四

第三十八章 外部の事に於て善く自己を治め……………三六一

第三十九章 危急に當て神にたよるべき事……………三八〇

第四十章 人は事務の條件に於て怫然たる……………三三三

第四十章 べからざる事……………三八三

第四十章 人には自ら一事の善なく又驕る……………三三〇

第四十一章 べきものなき事……………三八五

第四十一章 凡て俗世の名譽を輕すべし……………三九一

第四十二章 平安は人によりて受くべからざる事……………三九五

第四十三章 益なき世俗の智識を避くべき事……………三九五

第四十四章 外物に心を留めざる事……………四〇〇

第四十五章 凡ての人を信用すべからざる事……………四〇六

第四十六章 及び言語を以て誤り易き事……………四〇二

第四十六章 誹謗の興る時は神を頼とすべし……………四一〇

第四十六章 事……………四一〇

第四十七章 凡ての難事は永遠なる生命を得
ん爲に忍ぶべき事……………四一六

第四十八章 永遠の世と此世の窘迫なる事……………四二二

第四十九章 永生の願望および健闘する者に
は夫なる報酬の約束ある事……………四二九

第五十章 孤寂なる人は已を神の手に托ぬ
べき事……………四三八

第五十一章 高尚なる勤勞を執るに力足らざ
る時は自ら卑下なる事業に當る
べき事……………四四八

第五十二章 人は自ら安慰を受けるに足らず反
て懲戒を受くべきものと思ふべ
き事……………四五〇

第五十三章 神の恩恵は地上の事物を嗜む者
とは相容れざる事……………四五五

第五十四章 私愛と聖愛の行動相異なる事……………四六〇

第五十五章 人性の罪深き事神恩の勢力ある
べき事……………四七〇

第五十五章 事………四七〇

第五十六章 己に寛ち又十字架によりて基督………四六〇

に做ふべき事………四七六

第五十七章 過失に陥ることをありとも甚しく
落膽すべからざる事………四八四

第五十八章 高遠なる事と神の秘がなる審判
とを涙りに精究すべからざる事………四八八

第五十九章 期望と信託は凡て神にのみ定置………四九八

すべき事………四九九

世範卷之四

聖餐を受授するの要訓………五〇五

第六十章 基督を領るに大なる恭敬を以て
すべき事………五〇五

第二章 聖餐に於て神の大なる慈愛の人
間に顯はる事………五二二

第三章 屢聖餐を領れば最も益ある事………五二八

第四章 敬信を以て聖餐を領る者には………五三六

多くの恵を賜ふ事………五三四

第五章 聖典の尊ぶ事并に長老の地位……五四二

第六章 聖餐前の準備を尋る事……五四六

第七章 内心を詳省し悔悛の志を定むる事……五四七

第八章 基督の十字架上の供物及び己を捨る事……五五三

第九章 我身と我所有とを神に捧げ又萬民の爲に神に祈るべき事……五五五

第十章 輕忽しく聖餐を廢すべからざる事……五六〇

第十一章 基督の聖躰と聖書は信仰ある靈魂に必用なる事……五六八

第十二章 聖餐に與からんとする者は基督を領くる爲大に力を盡して其準備をなすべき事……五七八

第十三章 篤信家は全心を以て聖餐に於て基督に結ぶを願ふべき事……五八四

第十四章 基督の躰を領けんとする篤信家……五八八

第十四章

の熱望……………五八八

第十五章

熱愛の恩は謙遜と己を捨るによ……………五八四

第十六章

りて得らるゝ事……………五九二

第十七章

己の望み需むる所を基督に開陳……………五九八

第十八章

し以て其恩を祈るべき事……………五九七

第十九章

宜しく熱愛と切願を以て基督を……………六〇〇

第二十章

傾くべき事……………六〇〇

第二十一章

人は妄りに聖典の事を議すべか……………六〇六

第二十二章

らず唯謙遜を以て基督に従ふも……………六〇六

の、如く己の感覺を信仰に服せ

しむべき事……………六〇六

世範全書目次終

世範全書目次

の、世の虚榮を輕んずべき事

六〇六

世範卷之一

靈魂の生命を保持するの要訓

第一章 基督に倣ひて世の虚榮を輕んずべき事

事

十約八〇
一二

一 我に従ふ者は暗中を行すと是れ基督の聖言にして我等

等真正の光により心の迷味を脱せんと欲せば必らず

主の行爲に法るべきを訓誨せるものなり故に我等の

最大要務とすべきものは耶蘇基督の生涯の言行を想

第一章 基督に倣ひて世の虚榮を輕んずべき事

二

望するにあり

基督の聖訓は諸聖人の教訓に優れり而して基督の靈を有する者は其聖訓中に包藏せるマナを得べし然れども多くの人は屢其福音を聞ても更に神を敬慕するの心を起すことなし蓋其心に基督の靈を有せざるが故なり實に基督の言行を充分に曉悟らんと欲する者は須らく先自らの言行をして基督の言行に適合せしめんことを努めざるべからず

(二) 假令克く三位一昧の説を了解し喋々之を辨明し得る

も若し謙遜の徳を缺ぎ従て三位一昧なる神の聖旨に稱はざれば何の益する所あらんや抑高尚の言論は人をして聖且義ならしむること能はず只德行は能く神の愛を傾けしむるに至るや明なり故に空しく痛悔の意義に通達せんより寧ろ心に痛悔の念を感發するの勝れるに若かず假令また聖書の全般に熟達し能く諸哲學者の言を知悉するも若し神の愛なく恩寵なからんには果して亦何の益かあらん
世間惟神を愛し之に専へ盡すの外は皆空の空にして

都て空事なり然らば人は世の虚榮を意に介せず惟天
國に向て其歩を進めんことは最も高尚なる智慧と謂
ふべし

朽果のべき財貨を慕ひ之に依頼ひは則ち空事なり名
譽を欲し高位を望むも亦空事なり肉慾を縦にし後遂
に恐るべき重罰を受くるの種となるものを追ひ求む
るは亦空事なり徒らに長壽を望み意を徳行に注がざ
るも亦空事なり常に目前のことのみ念ひ毫も將來を
慮らざるも亦空事なり瞬時にして過ぎ去るものに

懸懸して歡樂限りなき所に向て馳せざるも亦空事な
り箴言あり曰く目は見るに飽くことなく耳は聞くに
充ることなしと我等常に之を記憶し努めて見ゆるも
のを愛するの念を断ら思ひを轉じて見ゆる所のも
のを欣慕すべし蓋し私慾に耽るものは其良心を汚濁
し神の恩寵を失なへばなり

第二章 自己を知りて謙遜すべき事

(一) 多識を欲するは人の天性なり然れども惟多識なるの
みにして神を敬慕するの心なければ果して何の益あ

第二章 自己を知りて謙遜すべき事

らんや己が修養を怠り却て遠大なる天文學に通達せんことを努むる高慢なる學者は却て神に事ふる謙遜なる無識の農夫に劣れり故に能く己を知るものは益其思念を卑下し敢て他人の稱賛を容るゝことなし假令我世事の全般に通曉するも若し愛なくんば吾が行爲の善惡によりて審判し給ふ神の前に於ては將た又何の益あらんや
濫りに多識を求むること勿れ蓋し多識は心を錯亂詐偽に陥らしむること多し世の學識ある者人に智者と

せられ識者と稱せらるゝを以て無上の快樂となせり然れども世間多くの學術の中には靈魂を補益せざるが如きもの太だ多し然れば其極救を得るものを怠り却て無益の他事に汲々たるは愚の至りと謂ふべし夫れ多くの言語は靈魂を満足せしむること能はず惟善良の行爲は其心を慰籍し己を責めざるの良心は神の前に於て更に畏憚る所なし
智慧益進み識力彌富むに隨ひ其言行も亦之に伴ふて清潔に進まざれば其審判を受くるや更に嚴なる

べし然らば汝の技藝學問を以て心に驕矜することなく却て汝に興へられたる智識により其責の重さを恐るべし

(二) 汝許多の事を悟り得たりと思はゞ尙未だ知らざることの許多なるを知るべし汝自らを博識とする勿れ却て自らを無識と認めよ學識汝より博く聖經汝より熟達せる者極めて多し何ぞ人に先せんとするや汝若し有益なる智識を得んと欲せば須らく人に知られず人に貴ばれざることを望むべし

最も高尚にして最も裨益ある學問は深く自ら省み克己を知るにあり常に人を高貴とし自らを卑拙と思ふは是れ至智至誠の徳なり假令人の明らかなる罪又は至惡なる過失を見ることあるも之を以て己に劣れりとする勿れ蓋し汝も永く其善狀を保つや否知らざればなり凡て人は懦弱なるものなり就中汝は殊に懦弱なるものと思ふべし

第三章 眞理によりて教訓らるゝ事

(一) 虚聲外像に依らず直接に眞理によりて教訓られ眞理

一)の實況を知る者は幸福なり夫れ我等の考説我等の知
覺は屢自らを欺くことありて見極むる所至て少し
凡て深遠にして測るべからざることに付喋々辨難す
るは何の益あらんや假令之を知らざるも審判の日之
が爲に譴責を蒙ることなかるべし故に有益にして缺
ぐべからざるものを怠り有害にして奇なる物に心を
傾くるは愚の至りと謂ふべし是れ則ち目われども見
ること能はざるものにあらずや物の種を分ち類を定
むるは我等何の關係あらんや

永遠の道の語るを聞くものは許多の世説妄想に苦し
むを免るべし抑萬物の生ずるは道により萬物の語る
所は道なり道は元始にして亦我等に語れり故に此道
を容れざる者は正鵠の理解判定を爲すこと能はず萬
物の均一なるを見て其本源なるを知り一源によりて
萬物を察すれば心定り神にありて永く平和を保持す
べし

臆眞理なる神よ我をして際限なき慈愛の中に主と一
ならしめ給へ我屢多くの書を読み多くの話を聽て倦

厭いとしたることあり然しかれども我われが願ねがひ我が望のぞみは惟ただ主しよに在あるのみ願ねがはは識しき者しやをして盡ことごとく口くちを閉とぢしめ萬ばん物ぶつをして盡ことごとく主まへの前に黙もくせしめ主しよのみ惟た我われに語かたり給たまへ

(二) 入い其その心こころを二ににし愈い其その意いを誠まことにせば勞あませずして許あま多たの

高かう尚しやうなる事じ物ぶつを曉さとり得うべしそは天てんより智ち識しきの光ひかりを受うくればなり苟いやくも淳じゆん朴ぼく安あん定ていの精せい神しんあるものは假たご令ひ許あま多たの事じ業げふを執とるも錯さく亂らんすることなし必ひつ竟きやう其その爲なす所ところは皆みな神かみの榮は光いかりを現あらはさんとし中ちゆう心しん煩ざんる平へい靜せいにして毫せこも自みづかちの爲ために圖はかる所ところなきを以もつてなり抑おさめ汝なんぢを煩はん妨ぼうするも

のは誰たぞ汝なんぢの心こころの制せいし能あたはざる慾よく情じやうにあらざるや善ぜん良りやうにして神かみに敬けい從じゆうするの人は其その爲なさんと欲ほつする所ところは必かならず先まづ之これを心しん中ちゆうに畫かく策さくし而しかして其その事ことに臨のぞむや過くわ度どの慾よく情じやうに誘いはるゝことなく惟ただ正せい理りに從したがひて之これを處しよ斷たんせり誰たれか己おのれに克かたんとするものより激げき烈れつなる戰せん争そうを爲なすものあらんや我われ等らの専せんら勉めんむべきは己おのれに克かち日ひ々ひ強きやう健けんを加くはへて善ぜんに進まむにあり

(三) 今こん世せいに於おいて完くわん全ぜんとする所ところは其中そのうち多た少せうの不ふ完くわん全ぜんを混こん有いゆうし我われ等らの保たもつ智ち識しきにも亦また幾いく分ぶんの不ふ明めいなきこと能あたはず

神かみに近ちかくの正路せいりは深ふかく學理がくりを探究たんきやうするにあらす惟謙たいけん
 遜そんにして己おのれを知るにあり然しかれども學問がくもんを爲なすは固もとよ
 り惡あしきにあらず且かつ何事なにごとを論ろんせず萬事ばんじ皆善みなよとして神かみ
 の定め給たまふ所ところなれば之これを知悉ちしつするは答こたへべきにあら
 ず惟博たいひろく事ことを識しらんより寧むじろ良心りやうしんに従したがひ行おこなひを正確せいかく
 にするに若しかすと云いふのみ然しかれども人多ひとおほくは徳とくを修おさ
 めるに力ちからを用もちふること薄うそくして只專ただら智識ちしきを得とれど
 する故ゆゑに心こゝろ屢しばしば迷亂めいらんして其結そのむすぶ所ところの果はは殆ほとんどなき
 が如ごとし

嗚呼あゝ人喋ひとてう々として事物じぶつの辯論べんろんに勞らうするが如ごとく不善ふぜんの
 根ねを斷たち善ぜんを植ううるに汲き々たらば世よに夥あまた大おほの害惡がいあく起おこ
 らず又また修道院しやうだういんの中うちに多おほくの放佚はういつ行おこなはれざるべし
 實じつに後世こうせい審判しんぱんの日ひに於おいて我等われらが受うくる所ところの審問しんもんは讀よ
 書の如何いかんにあらずして其行爲そのおこなひの如何いかんにあり又また辯論べんろんの
 巧拙かうせつにあらずして敬神けいしん修徳しゆとくの是非せいひにありとす
 汝なんぢ試こころみに知しる所ところの學士がくし等の狀況じやうきやうを見みよ彼等かれら尙世なほよに
 在あるの日ひ其富榮そのふやうを極きまめたるも今は果はたして何所いづくにかあ
 る他人たにん代かりて其地位そのちゐを占しめ恐おそらくは先輩せんぱいを思おもふ事ことさ

へ稀まれならん彼等かれら在世せいせいの時多少ときたせうの名望めいぼうを有いうせしも今は
其名そのなさへ語かたるものなし嗚呼あゝ世榮せいじょうの消亡しょうぼうする何なんぞ其れ
速すみなる乎や

彼の人々かれらが學者がくしやにして行爲かうゐ能よく其智識そのちしきに伴ともは、其勉そのべん
學讀書がくどくしよは大おほいに益えきたりしに惜哉あはれ世よには神かみに事つかふるこ
を忽ゆるがせ諸しよにし却かへつて無益むえきなる學事がくじを勵はげみ以もつて滅亡めつわうに陥おちる
もの多おほし己おのれ謙遜けんそんの人ひとたることを求めず却かへつて自ら尊そん
大だいの人ひとたらんことを欲ほつして其思念そのしなんを亂みだし愚おろなる心こころは
尙なほ樂味らくみとなれり

夫れ真まことに尊大そんだいなる人ひとは大おほいなる愛あいありて己おのれの卑小ひせうなる
を知しり至高しこうの光榮くわうじょうといへども更さらに心こころに淫いんすることな
し眞まことの智者ちしやは基督キリストを得えんが爲ために世よの總そんての物ものを糞土ふんど
の如ごとく思おもふものなり眞まことの博學者はくがくしやは神かみの聖旨せいしを行おこなひ己おのれ
二の意思いしを棄そつるものなり

第四章 行爲を戒慎すべき事

(一) 總もつて人ひとの言説げんせつ意見いけんは輕忽けいこつに信しんずべきものにあらず惟ただ
慎つしんで神かみの聖旨せいしに従したがひ忍耐にんたいして徐おもひるに計はかるべし
然しかるに哀哉あはれ吾人われら荏弱じんじやくの常つねとして他人たにんの善事ぜんじは舉あぐる

第四章 行爲を戒慎すべき事

イ箴十四
〇十五
ロ雅三〇
二

ことなく却て其惡は信じ易く言ひ易し凡て全き人は
他の言語によりて容易く信を措くことなし蓋し人は
一惡に傾く弱性ありて言語に於ては殊に誤失多きを
知ればなり

(二) 大智は其所業輕卒ならず又己が獨見を固執すること
なし總て各人の言を輕信せず或は聽き或は信するも
輕々しく之を人に漏すことなし汝常に實直明智の人
と相圖り單に己が所見に従ふことなく寧ろ己に優る
もの、教示を求むべし

イ箴十四
〇十五
ロ雅三〇
二

(一) 三人其身を修むれば從て神旨に適ふ智慧を得また許多
の事に練達するを得人益謙遜に進み神に歸順する
こと愈深ければ隨て萬事に聰明にして其心も亦平康
ならん

第五章 聖書を研究する事

(一) 聖書中にて求むべきものは能辨にあらまして眞理な
り總て聖書を讀ば之を記述せし前賢と同一の精神を
以て讀むべし抑聖書中にて求むべき所は其説の巧な
るにあらすして實益にあり

(二) 是故に簡略なる敬神の書は高尚にして深奥なる書に於けるが如く熱心を以て之を讀むべし而して其記者の學識に付て其廣狹淺深の如何を問はず惟純然たる眞理を愛するの念を以て之を讀むべし又言語は其何人より發せしやを問はず惟其語れる所の意義に注意すべし人は皆時と共に消滅すれども主の眞理は永遠に存せり神は偏頗なく我等に種々の法を以て語り給へり

(三) 我等聖書を讀むに當り其必要ならざることをも難問

講論する奇好心の爲に屢己を妨害することあり故に聖書を讀みて其身を益せんと欲せば偏に謙遜純粹及び信實の心を以て之を讀み決して博識の稱を求むること勿れ好んで諸聖賢の言行を尋ね謹黙して之を聞くべし又長老等の譬諭を心に厭ふこと勿れ蓋故なくして發したるにあらざればなり

第六章 過度の慾情

(二) 人、物を欲するの情、度に過れば中心乃ち錯驕す驕傲貪吝なる者は決して寧靜を得ることなく心貧しく

且謙遜なる人は常に平康を得て餘りあり

(二) 未だ全く己を殺さざる者は些細の事物にさへ誘惑せられ且之に勝るゝこと甚だ速なり精神弱く肉慾壯にして克く心を外物に奪はるゝ者は世慾を絶つこと至と難し故に斯の如き者は屢其慾を遁れんとして却て大に憂苦を覺ゆ人或は之に反對するものあらば爲に輒く憤怒するに至る又斯の如き人其慾に従はゞ忽ち己の良心に責られて心中大に苦惱を覺ゆべし蓋し其要むる所の平康を得るに益なき慾情に勝を與へた

ればなり

(三) 故に眞正の安寧を得んには慾情に従ふことなく却て之と拮抗せざるべからず然れば肉に屬し或は外物に溺るゝ人の心には平康あることなく惟靈に屬し熱心を以て神を恭ふ人の心にあるのみ

第七章 空望と驕傲を避くべき事

(一) 凡そ人を待み又他物に倚頼するは徒爾のみ耶蘇基督の愛の故を以て他人に事へ此世に於て貧賤とせらるるをも決して耻ること勿れ

三
一
二
三
四

正
正

イ彼前五
五

口耶九〇
三三、四、
哥前一〇
三一

三十四

汝己なんぢおのれを待たのます其希望そのぞらうは惟神ただかみに措おくべし汝力なんぢのちからの及およぶ
 ことば努つとめて之これを爲なせ神かみは汝なんぢの良志りやうしを補佐ほさし給たまはん
 汝己なんぢおのれが智識ちしきを頼たのみ又人またひとの巧智かうちに依よること勿なれ寧むしろ
 謙遜けんそんなる者ものを佐たすけ傲慢ごうまんなる者ものを卑いやしくし給たまふ神かみの恩おん
 寵ちやうたうを待たのむべし
 (一) 假令たとひ巨萬きよまんの財産さいざんを有いうしまれ權勢けんせいある朋友ほうゆうあるも以もつて
 誇ほこ威こるに足たらず惟萬物ただばんぶつを賜たまひ特ことに親みづからを興あたへんと欲ほつ
 (二) 給たまふ神かみを誇ほこるべし
 (三) 洗せん牀じやう驅くの長ちやう大たいなると容色ようしやくの優美いうびなるとに誇ほこ傲おる勿なれ

是これ皆みな輕症けいせうの疾病しつびにも傷癩しやういせらるることことあればな
 一 汝なんぢ天賦てんぷの才智さいちあるを以もつて樂たのしみとなすこと勿なれ恐おそらくは
 汝なんぢに總そうての美質びしつを賦與ふよし給たまふ神かみの聖旨みことろを患害そこなふこと
 あらん
 汝なんぢ自ら人ひとに優まされりと思おもふこと勿なれ恐おそらくは人ひとの中心ちゆうしん
 を知しり給たまふ神かみの前まへには汝却なんぢがへつて人ひとに劣おとれりとせらるる
 の憂うれひあらん善事ぜんじを爲なすも以もつて誇ほこること勿なれ神かみの判定はんてい
 は遙はるかに人ひとの判定はんていに異ことなり又人またひとの悦よろこぶ所ところは多おほく神かみの惡にく

第七章 空望と驕傲を避くべき事 一五

む所なり汝若し善事あらば人には尙多くの善事あり
 と思ひ以て自ら謙遜を守るべし汝凡ての人に謙ると
 も害する所なしされど一人にだも優れりとせば其害
 や實に甚しとす謙遜なるものは常に平和の喜びを受
 け驕傲なるものゝ心には屢嫉妬と憤怒を生ず

第八章 過度の交親を慎むべき事

(一) 汝人毎に心を開きて語ること勿れ知者或は神を敬畏
 する人と共に事を議るべし濫りに壯少者若くは未知
 者と深く交り親むべからず又富者に諂ひ或は好んで

夫人の前に出ること勿れ謙遜端正なる者敬虔徳行あ
 る者と交り互に益あることを謀り談すべし又婦女子
 と深く交親すること勿れ然れども凡て善良なる婦女
 子は之を神の恩恵に托せよ

(二) 常に神と其聖使に親しからんことを冀ひ以て人々の
 交知を避くべし我等能く萬の人を愛せざるべからず
 されど萬の人と深く親むは益なし我等他人の稱賛に
 依て未だ識らざる人を敬慕し而して直接相見るに至
 ては大に快らざることあり又我等人に交わり務め

其悦を攬らんと欲し却て吾が僻性を示じ大に其人の不快を招くことあり

第九章 從順並に人の支配を受くる事

(一) 從順にして長者の下にあり而して隨意に事を爲し得

(二) ざるは益多し蓋し長者となりて人を治むるより從順

にして人に治めらるゝは安然の道なり

人に從ひて世を渡るものありと雖も愛心によるにあ

ら未だ只止を得ざるに出るもの多し斯の如き人は常に

不満を懷き些少の事にすら咥くことあり若し自ら誠

實に神を愛するの心より人に從ふにあらざれば決して

て心志の自由を得ること能はず汝安然を探討て何處

に奔走すとも長者の下に服從せざれば之を得ること

能はず世間の人其居所を轉せば幸福を得んと妄想し

却て己を欺くもの多し

(二) 人各其知覺好情に適することを爲し又同氣相求む

るの情は天性の常なり然れども神我等の中に在さば

平安を保つ爲め時として吾が意を廢せざるを得ず

誰か能く萬事を知り得るの智あらんや故に汝自らの

意思のみ頼みとすることなく求めて人の所説を聴くべし

假令汝の思考完美なりと思ふも尙神の爲に之を捨て

他人の説に従はば汝に於て却て得る所あらん我

屢聞く人に向て己の意見を吐かんより人の意見を

聞て之に従ふは安然なりと

時として各の説一ならざるも皆其當を得たることあ

り然るに特別の理由あるに拘らず尙拒て他人の説を

容れざるは驕傲にして頑固なるの驗なり

第十章 多言を慎むべき事

一 汝力を盡して世の紛擾を避くべし何となれば假令

信實なる心を以て世事に與かるも爲に大なる阻害を

生ずることあり又我等は汚穢に染み虚事に陥り易け

ればなり吾言を發して後沈黙の勝れるを知り又人と

交接て後之に接せざるの善さを覺ゆること屢なり

二人と談話するの際必らず其良心を害するものあり然

るに我等猶好んで輕々しく談話するは何ぞや蓋し我

等相互に談話するを好む所以は互に安慰を交換し平

素多事に困憊したる心思を鎮靜せんが爲なるべし而
 じて又は好んで思念し且言語に發するは我等の愛慕
 するもの或は吾が意に反して不快を感ずる所のもの
 なり然れども惜哉此思念言語は屢無益に屬し更に得
 る所なきことあり是他なし外部の安慰は神より享る
 内心の安慰を失ふこと少からざればなり
 (三) 故に我等は無益に時を費さるるが爲め警覺して祈ら
 ざるべからず汝若し語るべきの時機を得て心に益あ
 りと思は務めて互に徳を建てることを談せよ世の惡習

と吾が修徳の上達に注意することを怠るにより終に
 其言語を慎まざるに至る然れども敬虔を以て靈魂上
 の談話を爲すは大に精神の發達を扶助せり況んや亦
 意氣相投合するもの神に在りて相集會するに於てを
 や
 第十一章 平安を求め并に靈魂の上達を熱
 望する事
 (一) 我等若し己に關せざる他人の言行に干渉することな
 くして己を煩はすことなければ多く平安を得べし己

れ世人の苦難を買ひ多く身外の事に注意し自ら省
 ることの稀なる者は永く平安の中にあることを得ん
 や

心の單純なるものは幸福なりこれ平安の悦び多けれ
 ばなり

聖徒等の中完全にして思想深き者あるは何ぞや是れ
 全く世慾を絶つことを努めたるが故に赤誠を以て神
 に屬従し自ら心閑裕なるを得たるなり
 我等は深く私慾に耽り又眼前の世事に傾くこと甚し

く全く己が悪習に打勝つこと稀にして日々上達せん
 ことに熱望せざるが故に心常に冷淡薄情なり我等若
 し其胸臆を亂すことなく全く己を殺したるものとな
 らば神の事を味ひ天上の事を考ふることを得べし
 我等第一の妨礙は慾情を脱せず務めて聖徒の完全の
 道を踐まず又一小禍に遭ふことあらば忽ち其心沮喪
 し轉じて世人の慰藉を求むるにあり
 (二)我等若し勇者の如く戰場に立て戦はゞ速に天より神
 の救ひの我等が上に來るを見るべし蓋し我等をして

勝を得せしめんが爲に戦端の時機を下し給へる神は
其恩恵に依頼して勇戦する者を助くるの準備をなし
給へばなり

我等若し曾に外面の儀式を遵守するを以て恭虔の上
達を得んと欲せば神を敬慕するの熱心は忽にして其
跡を絶つべし之に反じて我等宜しく斧を樹根に置き
慾情を芟除して以て靈魂の安寧を保つべし
我等年毎に其一餅を根絶することを得ば完全の人と
なること至て速なり然るに最初神に歸せし時の善良

清潔を數年後の今日に比すれば遙かに最初の優る所

一あるを見る

吾が熱心と上達は日々に増進すべきものなるに其實
然らず今僅かに始めの熱心の一部分を存有すること
あらば以て美事となせり
若し始めに刻苦して善事を爲さば向來萬事を爲すに
易く且快樂なるべし吾が習慣を去るは難事なり又己
が嗜慾に敵するは尙難しとす然れども易々たる瑣事
に勝ざれば何ぞ其難事に勝つことを得んや嗜慾の發

する時は速に之に抗敵し悪習は努めて之を改悛めよ
然らざれば恐らくは汝をして漸々至誰に陥らしむる
ことあらん

嗚呼汝謹慎するに依て心に平安を得他人に悦びを及
すことを知覺せば必らず熱心に靈の上達を計るや疑
ひなし

第十二章 苦難の益

(一) 我等時々困難妨害に遭ふは益なり蓋し災害は屢身を
省みせしめ又此世に在るは恰も放逐者の如きものな

りと思はしめ以て望を世事に屬ぐべからざるを知ら
しむればなり

吾に反對する者に遭遇し又善志を懷き善事を行ふ時
に當りて他人より輕侮蔑視せらるゝは是亦益なり斯
の如きは謙遜の徳を養ひ虐榮に陥ることなからしむ
若し人吾を侮辱し且吾を信せざれば神を衷心の保證
として求むるの念を切にすればなり故に人は神に依
頼の心を牢固くすべしされば多く人爲の慰藉を要す
ることなし

イ群一〇
廿三

(二) 善を求むるの人災害に陥り誘惑に逢ひ惡念に襲はる
 時に當ては特に神の缺ぐべからざると神に頼らざ
 れば二の善事も成し能はざることを覺るなり
 此時苦難を受くるに依りて悲哀號泣して神に祈り又
 其時生を厭ひて死を求め速く世を逝て基督と俱に居
 らんことを望み又其時至き安然と充分の平康は現世
 に於て得ることあらざるを確知すべし

第十三章 誘惑に敵すべき事

(一) 我等の世世に生存する間は決して困難誘惑なきこと

イ百七〇

口彼前四
〇七

ハ同前五
〇八

能はず約百記に曰く夫れ人の此世に在るは戰鬥にあ
 るが如くならずやと故に各自勉めて誘惑に敵し警醒
 祈禱して以て惡魔をして吾を欺くの機會を得ざらし
 むべし蓋し惡魔は眠る時なく常に奔走して吞噬すべ
 きものを探し索むればなり人は如何に完全清聖なる
 か尙多少の誘惑に遇ふことあり然らば則ち吾人にし
 て全く之を免かるゝことを得んや

(二) 然れども誘惑は固より厭ふべく憂ふべきものなれど
 又屢身に益ありとす人此に由りて謙遜を増し清潔

に進み種々の経験に富めばなり

(一) 凡て聖徒たる者は巨多の苦難誘惑を凌ぎて上達することを得たり誘惑を堪へ忍ばざるものは遂に墜落して

て凶びに陥りたり

(三) 如何に聖職に在り又静所に住するも決して苦難若く

は誘惑の不幸なること能はず如何なる人といへども

世に在らん限りは誘惑の境界を全く免かるゝことなし

夫れ我等は生れながらにして貪慾の心を存有す是

れ則ち誘惑の根元なり故に一の誘惑を脱し一の困難

〇八
へ同前止

〇九
〇十
〇十一
〇十二

一
〇

を除けば又別に入り来りて新陳代謝常に多少の堪へ忍ぶべきことあり蓋し我等は元始の幸福を失ひたるものなればなり

(四) 四人多くは誘惑を遁れんと欲して却て深く之に陥る

とあり我等は僅かに其場を逃避するのみにては之れ

に打勝つこと能はず惟忍耐と謙遜の二を以て諸勦敵

に勝るの能力を得べし

惟外面に於て誘惑を避けて其根元を刈除せざれば決して上達することなく誘惑は却て速に歸り来り且

憂ひ益甚し

誘惑なるものは激烈手段を以て芟除すべきものにあ
らざして推堅忍強耐せば漸を逐ひ神の冥助によりて
終に之に打勝つことを得べし誘惑に逢ふ時は能く大
と相謀り之に陥る者ある時は嚴威を以て遇すること
四なり汝の人に爲られんと欲する如く宜しく懇切に之
を慰藉すべし

正と悪しき誘惑の始めは心志の鞏固ならざると神に
依頼するの稀薄なるとに由れり恰も舵なき舟の波間

に漂搖せらるゝ如く放縱にして堅志なきものは殊に
誘惑に罹ること多しとす

(五) 火を以て鐵を試み誘惑を以て義人を利すと我等屢
自ら爲し得べき力を知らざることあり惟誘惑は我等

の眞價を示せり
然れども我等特に誘惑の始めに於て能く警戒せざる
べからず是れ敵をして心の中に入らしめず初めて心
の戸を叩くに當りて之を戸外に拒ぐときは其敵に打
勝つこと誠に容易なればなり故に曰く「悪は須らく

其始めに妨ぐべし悪漸く長すれば薬を用ふるも及ぶ
 ことなし」と夫れ誘惑の成るは初め心思に萌し尋で
 詳に之を想像し次に之を爲すを樂とし次に之を爲
 さんことを希望し終に意を決して之に服従す斯の如
 く我れ初めに此強敵を拒がざれば漸々心中に侵入せ
 らるべし若し人久しく怠りて之を防がざれば日々己
 正の力衰へ敵は反て益強盛に至るべし
 (六) 人或は神に歸するの始め直に大なる誘惑を受ること
 あり又久しきを經て初めて之に遇ふことあり或は殆

ん途生涯之に苦むあり又或は容易なる誘惑に罹るこ
 とあり是れ皆人々の情勢と價值とを計り撰民の幸福
 を完全せんが爲め萬事を定め給ふ公平全智なる神命
 の致す所なり
 故に我等は如何なる誘惑に遇ふも敢て失望すべきに
 あらず惟總ての艱難に於て恤み助け給はんことを只
 管神に祈るべきなり蓋し神は聖パウロの云ひし如く
 我等が其試惑を忍耐することを得る爲に試惑と共に
 逃るべき途をも備へ給ふべし

神は謙遜の者を助けて高くし給ふが故に我等誘惑艱
 難に遇ふ時は其靈魂を神の大能の手下に置いて謙遜す
 べきなり夫れ人誘惑艱難に遇はば如何に己を益せら
 るゝやを證し其報賞は之に由て益巨大となり其徳
 行は一層勝りて光輝を放つべし人若し敬虔にして熱
 心なるとも艱難に逢はざれば固より稱揚するに足ら
 ず然れども艱難に於て能く耐へ忍ぶことを得ば其上
 達に望みあること大なり
 人或は大なる誘惑を免かるゝも却て日々に起る小な

三もの敗るゝことあり是れ其小事に敗るゝにより
 て遂には自ら謙遜の心を生じ大事に於ては固より己
 の待むべからざるを覺しめんが爲なり

第十四章 暴議を避くべき事

- (一) 汝自ら省みて他人の行爲を議すること勿れ他人を
 議するは徒勞にして誤惑多く且輕卒に罪を犯すこと
 あり然れども自ら省察するの勞は實益あり
- (二) 我等屢己の好惡に任せて裁決することあり此乃ち
 己の好む所に偏僻して容易に其當を誤る所以なり若

五〇
 一六五〇
 我が目的純然にして惟神に向はゞ假令我が熱念に
 忤ふことあるも決して之に困むことなし然れども屢
 心中に潜むものあり或は他より入り来るものありて
 等しく我を誘ふことあり
 人多くは其行爲に於て秘かに己が利を求めて自ら知
 ず如斯人は事の己が志意に適ふときは以て心の平安
 を保つが如くなれども若し其希望に逆て起る時は忽
 ち其心騒ぎ憂ふべし
 (三人の意見と判定は各異なるが故に朋友同邦人及び教

友篤信者の間にも動もすれば葛藤を生ずることあり
 舊習は脱し難し人己の未だ見ざる所に導かるゝを好
 まず若し己の勉強と智慧に依頼して耶穌基督の己に
 従順はしむる能力を待たざれば眞の光を得ること難
 かるべし蓋し神は人をして全く其聖旨を遵奉せしめ
 且熱愛によりて總て人智の及ばざる所にも達せしめ
 んど欲し給へばなり
 第十五章 愛によりて行ひたる所爲の事
 (一) 如何なるものを望み如何なるものを愛するが爲にも

一毫の悪をも犯すべからず然れども究乏者を救恤す
 る爲に善行を中止することあり又一層の善き行に
 換ゆることあるべし如此は善行を消滅することな
 く却て二層優れるものに變化すればなり愛なき表面
 の行爲は固より益なし愛に由て行ふ處は如何に些少
 にして輕蔑せらるゝ事といへども其結ぶ所の果豊か
 なるべし蓋し神は行爲の多少を以て人を量り給はず
 其行爲の出る源によりて人を量り給へばなり愛多き
 ものは多くの事を爲すなり一事を能く爲すものは多

この事を爲すなり私意を挾まず公衆の爲に計るもの
 (一)は能く事を爲すなり
 (二)屢愛より出るが如くして其實私慾より來るの行爲
 あり蓋し是れ生來の性僻自念報賞の希望及び己が益
 を計るの意常に去り難きが故なり
 眞誠の愛心あるものは一事を爲すも己が爲にせず萬
 事惟神の榮光を顯はすのみを計畫す
 私樂を欲せざるが故に人を妒まず又己を以て喜びと
 せず却て神に在りて幸福を享くるを以て第一の望と

而して善事は皆人に歸せず悉く之を神に皈せり蓋し
 萬事は泉源より水の出るが如く皆神に依て出で諸聖
 徒も終に神に依て喜樂平安を受くべければなり
 嗚呼眞誠の慈愛を少詳たも有するものは直に世間萬
 物の全く空虚なるを知らん

第十六章 他人の缺點を堪へ忍ぶ事

(一) 己或は他人に於て改むる能はざる事は神の矯正し
 給ふまで忍耐すべし斯事や或は己を練達忍耐せしむ

るならんと思へよ若夫れ之れなければ徳行は貴重す
 るに足らざるなり然れども此妨害に逢はば神汝を助
 け甘んじて忍耐する力を與へ給はんことを祈禱るべ
 し

若し人を説諭すること再三に及ぶも敢て聽從せざれ
 ば之と争はずして全く神に托せよ是れ神は能く惡を
 化して善となすことを知り給へば其臣僕をして聖旨
 を成し榮光を顯はさしめ給ふべければなり
 (二) 他人に如何なる缺點あり懦弱あるも之を忍耐するを

二 勉めよ汝も亦他人に忍耐せらるべき事多ければなり
 汝自ら欲する所の人の如くなることを得ざれば如
 何にして他人を悉く我が欲する所に化するを得ん
 や
 我儕は勉めて人を完全ならしめんと欲すれども己の
 過失を改むるは却て客なり我等は他人の嚴に謹らる
 ることを望みて自ら謹らるることを好まず人の自由
 の無限なるを惡めども己の望みを妨げらるることを
 欲せず人の苛酷の法律に束縛せらるるを欲すれども

イ加六〇
 二同六〇
 五同六〇
 ハ哥后三
 〇五三〇
 七二〇

己は之に制せらるるに忍びず
 故に知る隣人を見ること己の如くなること稀なるを
 (三) 若し人皆完全ならば我等何をか神の爲に他人に對し
 て忍耐するの要あらんや然れども今や神は世の事を
 定めて吾人互に重荷を負ふことを習はしめ給へり人
 誰か過失なく重擔なく足らざることなくして完全の
 智識を有するものあらんや然らば乃ち吾人互に重荷
 を負ひ相慰藉扶持し相教諭せざるべからず
 各人持する處の徳行の如何は禍災の時に於て判然と

じに劣るべし是れ禍災は人を軟弱するにあらず惟人の性質如何を示すものなればなり

第十七章 修道士の事(以下四章は特に修道士の爲に記したるものなり)

(一) 汝人と平和親睦を保たんと欲せば許多の事に於て己が欲する所を棄ることを學ぶべし修道士若くは公共會院杯は居りて同輩と喧くことなくして交際し死に至るまで忠信なるは是れ決して小事にあらず能く茲に生活して幸福に其生を終らざる者は實に祝すべき哉

○三〇
○三〇
○三〇
○三〇
○三〇

イ羅十一
○十三

ロ番前四
○十

若し汝の爲すべき義務ある如く茲に堅く立ち且上達せんを欲せば宜しく自ら地に在りては逐客なり賓旅なりと思ふべし實に修道士の生涯を送らんと欲せば基督の爲に愚者とせらるゝことを甘せざるべからず修道士の法衣を着け頭髮を剃るは益少し眞誠の修道士となるは惟風習を變化し全く情慾を殺すにあるのみ

(二) 夫れ神に奉仕し己が靈魂の救ひを求むることへののみ其心を用ひずして之を他に馳する者は惟患難憂愁の

〇十三
〇十四
〇十五

外得るものなし又卑小者となり他人に使事すること
 二を望まざるものは永く平安を保つこと能はず
 汝の愛に来るは決して入を治めん爲にあらず却て之
 に使事んが爲なり又汝の召れたるは怠惰りて空談に
 時を費さんが爲にあらず困苦勞働せしめんが爲なる
 を知れ茲に在て人の試みらるゝは怡も爐中の金の如
 し茲に在る人は乃ち全心を以て神を敬愛し爲に謙遜
 らざれば如何で立つことを得んや

第十八章 聖列父の龜鑑

(一) 聖なる列祖の活潑なる龜鑑を觀察し眞實の完全と敬
 虔の其中に耀くを見よ我等の今日爲す所は如何に小
 にして殆んどなきが如きを覺らん嗚呼彼等と比較せ
 ば我等の生涯は果して如何ぞや基督の聖徒と朋友等
 は饑渴、寒凍、裸躰、勞働、困憊、徹夜、禁食、祈
 禱、聖き黙想、許多の迫害、罵責是等の苦難に堪へ
 て主に使事たり噫基督の聖蹟を賤まんと務めたる使
 徒、殉教者、唱道者、處女及び其餘の者が受けたる
 悲しむべき苦難は幾何じや是れ彼等は無究なき生命

を保んが爲に此世の生命を惜めばなり
 嗚呼列祖の中には彼の荒野に於て嚴格にして己を棄
 てたる生涯を送りしは如何ぞや永く悲むべき誘惑を
 受け屢敵に襲はれ數々只管の祈禱を神に捧げ嚴重
 なる禁食をなし又靈の上達を謀りて熱心し其情慾に
 克んが爲には強き戦を爲し神を欣慕して心を清潔單
 純にしたるは如何ぞや
 晝は勞働に従事し夜は長さ祈禱を勉めたり其勞働の
 間も尙黙禱して止まず彼等は光陰を徒消せず神に奉

仕せんが爲には其時の短さを覺ゆ沈思によりて大な
 る快樂を感ずるが故に肉牀營養の必用すら忘却する
 に至れり
 彼等は凡ての富貴名譽朋友親戚を棄て、世に屬ける
 ものを望まず生存に要用なるものも敢て取らず假令
 身牀の必要に迫るものあるも之に勞役するを憂ひた
 り故に彼等は世の物に於ては貧困なれども神恩と徳
 行には甚だ富有たり彼等の外貌は至て貧しけれども
 内心は常に神の恩藉と快樂に充てり

彼等は世に對しては疎濶なれども神に在ては近親の友たり自ら我身を願れば有るものなきが如く又世には卑しく見ゆれども神の眼には貴くして撰拔せられたるものなり彼等は眞の謙遜に立ち純粹の柔順に活き愛と忍耐に於て行歩す故に靈魂日々益上達し神の前に大なる恩恵を得たるなり

彼等は是れ諸修道者の模範として與へられたるものなり我等は儒夫に習ひて怠慢せんより寧ろ列祖に從ひて上達に熱心すべし

(二) 嗚呼修道院組織の當初に於て修道者の熱心なりしは一果して如何ぞや其心を専ら祈禱に用ひ徳に於ても他に勝らんとの大望を懷き甘んじて嚴正なる罰則を守り長者の治下に在て尊敬と從順を表せしは實に感ずるに餘りあり彼等は實に神聖完全なる者にして且大なる勇氣を奮ひて世を足下に蹂躪したるものなり其行跡は今尙明かに之を證するに足れり

今や院中の法律に觸れず入院の規約を堪へ忍んで守る者は我等の中に於て大人といはるゝなり嗚呼今時

の冷淡怠惰なる何ぞに茲に至るや我等は期くも迅速に當初の熱心より離れ冷淡懦弱に驅られて生涯を懶しとするに至れり
 汝屢熱心家の模範を見れば徳に進まんとするの心汝の中にも眠らざらんことを余は深く希望する所なり

第十九章 善良なる修道者の修行

(一) 善良なる修道者は總ての徳誼に充たさるべし蓋し他人に見らるゝ外貌の如く其中心も亦同一ならざるべ

からず實に外に顯はるゝものより其内なる心に於ては一層の美德を備具ふべきなり蓋我等を照鑒するものは神なればなり我等は如何なる所に在ても特に神を尊敬し其目前に於ては天使の如く極めて清廉を以て行歩むべきなり

我等は日々に其志を新にし恰も初めて神に歸したる日の如く己を勵まし左の如く云ふべし曰く「主なる神よ我が善き志を助け主に仕ふる清き勤勞をなさしめ給へ從來我が爲えし所業は無益なれば今日よ

り完く始むることを得させ給へ」と
我等の靈の上達の多少は其志望に應じて定れり故に
多く進まんと欲するものは多くの勤勞を缺ぐべから
ず

若し志堅き者にして尙失敗すること屢なりとせば
志を立てること薄く又決心なき者果して能く何事を
か爲し得んや我等が立志を敗るは種々の事情ありと
雖も故なくして修行を怠ることあらば靈魂の上には
幾分の損害を來さるること稀なり義人の立志は自己

イ箴十六
〇九、
口耶十〇
廿三、

の智慧に由るにあらず只神の恩恵に據れり故に彼等
何を爲すにも常に神に據らざることをなし蓋し事を爲
すは人にあり事の成るは神にあり人は自ら其步履を
定むること能はざるなり

時として信仰上の爲か又は兄弟を扶けんが爲常例の
修行を缺ぐことあるも此は後に回復すること容易な
るべし然れども怠慢なる心或は疎忽よりして輕々し
く此修業を廢るは大なる罪科にして亦己が爲にも大
害なるべし

我等は全力を盡して動ゆるも猶多くの事に於て及ばざることあり然れども其達せんと欲する目的は豫め定めざるべからば特に己を妨害するものに對しては之を定むること肝要なり

(二)我等は外觀と内情とを審査整理せざるべからず是れ共に靈魂上達に大なる關係を有すればなり
常に己を省むるは難しとするも尙少くも毎日一回朝或は夕に於て之を爲すべし朝に於ては善き意志を定め夕に於ては其爲したる所即ち己が言行思想に於け

る舉動は如何なりしやと省察すべし恐らくは神と隣に向て罪を犯せしこと數あらん

汝丈夫の如く腰に帶し惡魔の侵襲に抗し食慾に戀を置くべし然れば凡ての肉慾を抑制することを得ん全く身を怠慢に處することなく讀書、寫字、祈禱、默想或は公益の事業を勉むべし身軀を習練するは彼我同一なるを得ざれば各適宜にすべし

一般にあらざる修行は決して之を公になさずして陰になすを安然とす然れども一般の修行を怠りて私定

のものを勵むは謹むべし汝の規定されたる所は缺け
 なく誠實に成し遂げたるの後尚餘間あらば信仰の望
 所に従ひ己の修行をなすを得べし
 各人同一の修行を用ふること能はず彼に利あるもの
 と是に益あるものとは自ら異れり且時節の異同によ
 りて其修行も亦同じからざるべし聖日に適するもの
 あれば又平日に適するものあり或は誘惑の時に要し
 或は平和の日に要し又は憂悶の時に求め或は主に在
 りて喜ぶの時に求むるものあるなり

四四〇
 二〇四三
 二〇四二
 八〇
 十八

大齋日に當ては善き勤めを新にし又特に篤信の人の
 仲保を求むべし聖日と聖日の間には志を立て恰も
 本回の齋日には此世を辭して永遠の佳節に與らん
 一とあるものゝ如くすべし是に由り日ならず神より勤
 勞の報酬を受けんとするものゝ如く此聖節に於て謹
 密で充分なる豫備をなし清潔を専とし總ての規例を
 嚴格に守るべし
 然るに受報の日尙未だ至らざらんには自ら充分に備
 へずして定期に當て必らず現はるべき大榮光を受ける

に足らざるものなりと悟り一層勉めて辭世の豫備を
なすべきなり聖路加云へることあり曰く其主の來る
時に其目を覺し居るを見なば此僕は幸福なり眞に我
汝等に告げん其所領を皆彼に主らしむべしと

第二十章 獨居靜黙を愛する事

(一) 都合よき時を撰びて獨座し神の恩恵を默想せよ好奇
心を避け又讀書の時空しく頭腦を煩すべきものより
も寧ろ痛悔の念を生ずべきものを撰擇すべし
若し汝雜談漫遊をなし或は奇聞風評は耳を働くること

等に遠ざからば良き思想を練るに充分なる適應の時
間を得べし

古の大聖徒は時機を得て人々と交はることを避け
陰に生涯神に奉仕することを擇びたり

或人曰く「我人と交はりて歸る毎に多少人たるの品
格を卑くせるを覺ゆたり」と我等久しく人と談話す

る時は此語の眞なるを知れり己が必用を超えて語る
を謹むより寧ろ初より沈黙するは容易なりとす戶外
に於て正しく身を修むるより室内に潜居するは甚だ

容易なり

故に聖靈の示せる奥義に達せんと欲せば須らく群衆
雑沓を避けて耶蘇と共にあらざるべからず

(二) 獨居を甘んずる者にあらざれば戸外に出ること安然

ならず人に治めらるゝことを甘んずる者にあらざれば
人を治むること安然ならず能く人に従服するを學
びし者にあらざれば人を制すること安全ならず良心
の責めなき者にあらざれば喜ぶこと安全ならず

然れども尙聖徒の安全は神を敬畏するの心常に充實

せり而して彼等は大徳を備へ神恩に秀るも一層戰慄
と謙遜を飲ぐことなし之に反して邪惡の人の安全は
高慢と倨傲より成るが故に終に變化して己を欺ぐに
至れり

汝善良なる遁世者或は篤信なる獨居者と見ゆるも
此世に於ては決して安全を望むべからず人に尊敬を

三 受け其徳ありと思ふものは自信の過るを以て屢危難
に陥ることあり故に人は全く誘惑を蒙らざるより寧
る度々之に刺撃さるゝを利ありとす然らざれば安に

口提後二
四

過とぎて忽たちまち傲慢がうまんの心こころを生しやうずるか若もくは擅はしに外部がうぶの慰なぐさ
藉さゝを慕したふに至いたらん

(三) 臆おそ若もし人ひと浮雲うづらの歡樂くわんらくを求めず世事せいじに苦心くしんせざれば其その
心こころの清潔せいけつなること如何いかんをや若もし又また無益むぎなる思慮しりよを悉ことごと
く脱去だつぎよし只敬神たいけいしんと有益いうげきなることを考量かうりやうし凡まづて望のぞを神かみ
に托たくせば其平素安心そのへいそあんしんは亦如何またいかに大おほなるべき乎

聖きよき痛悔つうくわいを務つとむるものにあらざれば決けつして天てんの安慰あんい
を受うくるの價値あたいあることなし心こころの深底しんていより痛悔つうくわいを覺おぼ
わんと欲ほつせば宜よろしく汝なんぢの閑房かんぼうに入り世よの風潮ふうせうに遠とほざ

ハ太六〇
六

ニ詩四〇
五(羅)

かこるべし録ろくして汝なんぢの室房しやうぼうに於おいて悲歎かなしめとあるが若ごと
し

室外しやうがいに於おいて數々しばしば失しなふものも室内しやうないに歸かへりて之これを再拾さいしよす
ることを得えん其室そのしつに入いること頻繁ひんぱんならば從したがて之これを好この
む心こころも亦深またあきに至いたらん然しかれども之これに入いること稀粗きそな

らば忽たちまち倦怠けんたいの心こころを萌生ぼうせいせん故ゆゑに起信きしんの當初はつしめよりし
て絶たえず室内しやうないに在あることを勤つとめば遂つひに汝なんぢの良友りやうゆうとな
り最もつとも快こころよき慰なぐさとなるべし

敬信けいしんの心こころは沈黙靜座ちんもくせいざに依よりて進歩しんぱし且かつ聖書せいしよの奥義おくぎを習なら

第二十章 獨居靜默を愛する事

七九

ふべし此沈靜の座側に於て彼の涙の川流を見認め之
に就て毎夜己を洗ひ潔むることを得べし是故に世の
紛擾を隔つこと益遠ければ造物主に親昵すること
彌密なり又知人朋友に遠かる者は神其聖使を率ひ
て近付き給ふべし

(四)己を省みずして大なる休徴を顯はさんより寧ろ身を
靜閑に處して自ら謹慎するの勝れるに如かず修道者
の多出する稀にして人を見或は人に見らるゝことを
好まざるは讀むべき哉

汝何ぞ己が所有に歸すべからざるものを見んと思ふ
や此世と其愆とは共に逝き去らんと肉慾は我等に外
出を催して外に漂泊せしむ時過て家に歸れば果して
何の得る所あるか只良心の憂と紊亂を醸するのみ喜
ばしき首途は屢悲しき歸着を生じ樂しき夜の深更は
悲しき晨の原なり斯の如く凡て肉に屬する喜樂は其
入り來ること甚だ徐かなれども終に蛇の如く噛み傷
けて死に至らしむ
此院中に於て見るを得ずして他所に於て見るを得べ

さもの果して何ぞや茲に天あり地あり又諸の原素あり萬物是に由て造られざるものなし

汝何所に行くとも永く宇宙に留まるものを見ることを得んや汝恐らくば満足を得んと欲すれども曾て之に達し得べしにあらざる假令汝の目前に萬物を並列して見ることを得るも只是れ空虚なる光景にあらざるや

宜しく汝の目を擧げ最高に在す神に向ひて罪と悔を赦されんことを祈禱するべし空虚なる事は空虚

なる汝に委ね汝は惟神の命に給へる所に其心を専らにせよ汝宜しく戸を鎖じて汝の愛する耶穌を招聘し彼と共に汝の室房に止るべし蓋し室外に於ては此の如き平和を得ることも能はざればなり汝外に出ず又風評を聞ざりしならば心意の寧靜を保ちしならん然るに時々新奇を聞かんと願ふが故に其心に不穩を覺ゆるは當然なり

第二十一章 心の痛悔

(一) 些少なりとも上達せんと欲せば須臾も神を敬畏する

一)の心を放たず又過分の自由を願ふべからず自ら五感を抑制し愚蒙の遊樂に沈溺すること勿れ而して心の痛悔を専らとせば必ず之に由りて敬信を得べし夫れ痛悔は多くの善事を發揚し遊惰は却て速に之を失はしむ

人若し己の放逐せられたる状況及び己が靈魂の多くの危険なるを思量せば尙此世に於て全き喜悅を得るは實に奇怪といふべし我が心の輕薄と其誤りを深き意とせざるよりして靈魂の憂苦をも覺ゆるに至る

是故に正に哭すべき時に於て漫りに笑ふこと屢あり神を敬畏れ良心に従ふにあらざれば真正の自由正實の歡樂あることなし

總ての粉雜なる妨害を抛棄し只切に聖なる痛悔を求むるものは幸福なり己の良心を汚濁し且憂へしむる總てのものを棄るものは幸福なり

(二)丈夫の如くして惡とへ然らば慣習を以て慣習に克つことあるべし
汝若し人の事に干與らずば人も亦汝を妨ぐることな

からん他人の事務に干渉り或は高貴の人の事情に干
 與ること勿れ汝自ら注意し其愛友に先て宜しく己に
 嚴戒を加ふべし
 人に親愛せられざるを悲むこと勿れ惟篤信にして神
 の僕と稱せらるるに足る行爲を缺ぎ獻身せし修道士
 の如くならざるを愁ふべし此世に於ては慰藉殊に肉
 に屬する慰藉を多く有せざるは人の爲に許多の益あ
 りて且安全なり未だ嘗て天の慰を得ず或は之を覺め
 ること稀なれば其責を己に歸せよ蓋し其慰を得ざ

るものは心の痛悔を求めず又總て無益なる外部の
 慰を抛棄せざるが故なり
 汝天の慰を受るに足らず却て多く艱難を受けざる
 べからざることを自ら悟るべし人若し全く悔る心あ
 らば此世の事は總て悲歎にあらざるなきを知らん
 三善良の人は悲哀哭泣の原因を覺むることなし蓋し
 内に自ら省み外隣人の狀況を察するに苦難を受けず
 して此世に生存するものなきを知ればなり自ら省
 ること深ければ悲むことも亦深し

正實なる悲哀と内心の痛悔の原は我等の罪と過なり
我等之に沈溺するを以て天に在るものを考察するこ
と稀なり

三長壽を思はずして死の事を考察すること屢なれば切
に其身の過失を改悛すること必然なり若し心して來
世の刑苦を思考せば此世に於て如何なる勞苦をも厭
はず嚴格なる法則をも避けざるに至らん然れども是
等の事を心に入れず尙己を喜ばすべきもののみ愛す
るを以て我等は常に冷淡にして太だ鈍きなり

イ詩八十
〇五(羅)

我等賤しき肉躰として容易に不満を生ずるは是れ全
く我精神の柔弱なるに由るなり此故に我等に痛悔の
靈を賜はらんことを謙て主に祈り且彼の豫言者の
語を以て謂ふべし曰く主よ涕のパンを以て我を養ひ
多量の涙を以て我に飲ましめ給へと

第二十二章 人類の艱難を思察する事

(一)汝何の地に在るも何の方位に向ふも惟神に歸向は
ざれば憐むべきものなり
汝願望の達せざるを何故に憂ふるや萬事意の如く

なるもの果して何所にかある我も汝も地上の人々も
皆亦然り或は帝王たり或は法王たるも凡そ人として
多少の患難欲望なきこと能はず然らば則ち望まじき
地位を古むるものば誰ぞや惟神の爲に患苦を忍耐す
る力あるものなり
懦弱なるもの屢語をなして曰く見よ某の生涯は如何
に幸福なるや其富貴と權威を有するは實に羨むべし
と然れども目を擧げて天の幸福を見れば此世の幸福
は總て空虚なるのみならず實に頼むべからずして寧

る煩雜に過ぎたることを知るべし蓋し此等のものを
領せんと欲せば憂慮と恐怖の必らず伴ふものなれば
なり此世のものを饒かに領するを以て人の幸福とな
すべからず惟應分のものを以て足れりとすべし
人の此世に在るは實に艱難なり人若し靈に屬くこと
を求むること一爾切なれば此世の辛酸を感ずること
倍切なり是れ乃ち人類の汚穢を覺る現實に之を見
るによりてなり蓋し飲食、起臥、勞息或は其他の天
性の必需に應ずるは總ての罪より離れて自由を得ん

欲する熱心者の爲に實に大なる艱苦なること言を
嫉たざるなり我等の此世に在るや内心は其軀の必
要によりて多く苦めり故に豫言者は之を免れんこと
を切に祈禱りて曰く嗚呼神よ我を必要の艱苦より救
濟ひ給へと

然れども禍なる哉己の患苦を知らざる者よ此艱苦と
汚悪なる生命を愛する者は禍なる哉茲に人あり其勞
働若くは乞丐によりて僅かに己の必要を辨すといへ
ども夫に此世を愛するが故に若し永く此世に在ること

とを律ば天國のことは更に思はざるに至らん深く此
濁世に沈溺し肉に屬くもの、外は何をも心に介まざ
る輩は如何に不忠愚魯ならずや彼等は不幸なるもの
にして其終りに臨み其嘗て愛せしもの、卑くして且
虚しきを感憂するに至らん

之に反して神の聖徒基督に忠信なる友は肉を喜ばず
もの或は此世に於て榮ふるものを意とせず惟其完全
望と熱願を以て無限の榮福を慕へり彼等は目に觸る
ものものを望みて賤しきものに誘はるゝことなからん

口來十〇
三五

が爲に其全望を移して確然不朽目以て見るべからざる
 天に在るものに置けり
 我兄弟上靈魂上達の希望を抛棄することを勿れ時向あ
 り今其時なり汝何故に善き善きを日々に遅緩に付す
 汝等瞬時に起す之を始め而して斯く云へ今は事を爲
 すべきの時なり今は戦ふべきの時なり今は自ら改悔
 すべきの時なりと
 汝等若くは苦難の事に遭遇せば是れ則ち神は報
 を得るの時至れども知るべし汝等歡樂安寧の地に入

ハ詩六十
六〇十三

ニ詩五七
〇一、二、三、四、五
水哥后五

らんとすれば先水火の中を経過せざるべからず汝自
 ら強るにあらざれば過失に勝こと難し
 肉身の朽果ざる限りは罪科と倦厭苦惱なくして此世
 に在ること能はざるなり我等總ての苦難より逃れて
 安然を得んことは望願ふ所なれども一旦罪過はより
 て天性の清淨を失ひ併せて真正の幸福をも失ひたれ
 ば罪障消滅して死生に吞るゝ時至るまで宜しく耐忍
 して神の恩恵を待つべきなり
 (二人性の脆弱なるは實に大にして常に罪惡に陥ること

(二) 多し今日罪を懺悔するも明日に至れば其懺悔せし罪を再び犯し今茲に謹慎の志を立てつるも暫くして嘗て其志を立てざるものゝ如く行へり實に我等は脆弱にして且輕薄なるものなれば一に己を謙遜り固より自尊の念を懐くべからず若し夫れ己の心に怠慢の念を生せば多く苦勞し神の恩恵によりて漸く得たるものも速に之を消亡することあり斯く速に冷淡ならんとする我等の終結は果して如何ぞや我等の行爲に於て一も眞正の清淨を表するもの

○水○
○一○
○新○
○正○
○志○

なきに既に全く安然平和にあるものゝ如く自ら安せんを欲するは禍なる哉我等新入院者の如く再び善き行ひに付て教訓せらるべき多くの必要あるなり然れば幸にして今より心を改め鑿の事に上達すべき望或はあるならん

第二十三章 死を考想する事

(一) 現世の終結は甚だ速かなれば其將に來らんとする未來に於ては如何にあるべきやを考究すべし人は今日此世に在るも明日忽ち見ゆることなし而して人若

し其眼界の外に去らば亦其心より放たるゝは必然なり
 嗚呼人心の魯鈍と頑硬なること終に人をして未來の
 事を棄て只目前のことに汲々たらしむ汝の思想と行
 爲を慎みて今日若くは後刻將に死に臨まんとするも
 のゝ如くすべし汝若し良心に責なければ死は恐るゝ
 に足らず死を遁るゝは寧ろ罪を避るの優れるに如かず
 若し今日に於て準備完からずば明日は果して如何な
 るべきか固より明日は待むべからず汝生を明日に保

つ延ことを何に由て豫知する耶
 我言行の善きに改まる所斯く僅少なれば永く生を此
 世に保存も何の益あらんや嗚呼生命の永きは我言行
 を改むる機會にあらすして却て屢其罪を増加せり
 願くば現世に於て一日たりとも無瑕の日を得んこと
 を人多くは起信の後より今に至るの日を算すれども
 言行を改悛するの果は寔に少々なり夫れ死は恐る
 べきものとせば生命を永く保持するは尙危殆なるべ
 し

常に死期を己の眼前に置き日々死の準備をなすものは幸福なり汝若し他人の死するを見れば己も亦同じく此途を逃くものと心に留むべし朝に在りては復た夕ありと思ふ勿れ若し夕到れば敢て翌朝を期すること勿れ汝常に充分の準備をなし其準備なき時死の汝に臨まざる生涯を送るべし人多くは不意に死す是れ人の子思はざる時に來り給へばなり汝其終りの時來らば過去の來歴に就て異なる想考を起し等閑と怠慢とを以て世を過しことを大に歎息せん

(二) 今務めて其死期に満足すべき生涯を送るものは智者にして且幸福なるものなり我等の幸を以て死する望を興ふるものは全く此世を輕んじ諸徳に進歩せんとするの熱心を懷き規率を愛し痛悔と勞苦を忍び能く命令に服従し又己を棄て基督を愛する爲に如何なる災變にも耐ふること等なり

汝健康なるときは多くの善事を爲し得ることもあらん然れども疾病の時に當ては何をか爲し得んや余之を知らざるなり病に依て善に進み且心を改むる者稀

口耶十七
〇五

ハ哥后六
〇二

なるは恰も多く外に漂泊するによりて聖に進むもの
 少なきが如し
 朋友親族に依頼すること勿れ又汝の救を鞏固にする
 を遅緩すること勿れ夫れ人は汝の思ひより早く汝を
 忘却せん他人の助けに依頼するより寧ろ速かに茲に
 注意して遅緩せず時あらば善事を爲すべし汝自ら注
 意せずば後に誰か汝の爲に注意せんや
 時は今貴し今は救ひの日なり今は恤みの時なり汝後
 一の永生を購ひ得べき時に徒らに時日を費すは如何に

悲むべき哉言行を懐むる爲に一日或は一刻を請ふの
 日來らん然れども其願ふ所果して尤さるゝや否は吾
 知らざるなり
 嗚呼最も親愛なるものよ汝若し常に死を恐れ之を忘
 るゝことなければ如何に大なる危難を逃れ如何に大
 なる長怖より脱することを得べきぞ
 死に臨んで恐るゝことなく却て喜びを懐かんと欲す
 るものゝ如くして此世を送ることを勉めよ今此世に
 對して死することを香へ是れ後に基督と俱に生活を

始めんが爲なり總て世の物を輕んずることを學べ是
れ後に自由に基督に往くことを得んが爲なり又汝の
身を毆て痛悔すべし是れ後に確然たる企望を保んが
爲なり

(三) 臆愚かなるものよ一日も其生命を自保すること能は
ざるに何に由てか永く壽命を保つものと思ふや人は
多く欺かれつゝ不意に此世を逝れり汝屢風聞を耳
にせざるか云く彼は殺害に遭ひ是は溺死せり某は
高所より墜ちて其首を傷け死し或は食事の際又は

遊戯の時に頓死し或は火に燒かれ劍に没し或は疫癘
に斃れ又或は賊刃に害せられたりと其れ斯の如く人
の終結をなすものは皆死なり實に人生は影の如く不
意に逝ぎ行くものなり汝死するの後汝を紀念するも
のは果して誰ぞや又汝の爲に祈る者は誰ぞや
愛するものよ憤然として立ち其力の及ぶ限り今勉め
爲すべし是れ汝は其死する時をも知らず亦死して後
何事の來るかも知らざるなり今時あらば永久の富を
積み蓄ふべし汝救の外他事を思はず惟神に屬くこと

へ路十六
九、
十、
十一、
十二、

ト彼前二
〇十一、
チ來十三
〇十四、

四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、

を意とし神の聖徒を敬ひ其行爲に習て以て之を友とすべし是れ乏しからんとするるとき汝を永遠の安宅に接待ん爲なり
地に在りては賓旅寄寓者の如く此世の事に關係することなくして其身を保つべし此所に永住の城市を有せざるが故に汝心を擧げて神に歸し涕を添へて日々いのりの祈と歎きを捧ぐべし蓋汝死して後其靈は幸に主に達せんが爲なり アーメン

第二十四章 審判と罪人の刑苦

イ申三三
〇廿九、
ハ羅二
〇二、
彼前一〇
十七、

ニ伯九〇
三、

〇十二、
〇十三、

(一) 萬事に於て汝の終末を熟考し如何にして彼の嚴格なる判官の前に立つに足るかを注意すべし彼の前には物として隠るゝことを得ず固より彼は賄賂を以て其罪を輕減せず又遁辭を容れず只正實を以て其判決を爲すものなり
嗚呼汝時として怒れる人の面前をも恐怖する愚かなる罪人よ汝の諸惡を知り給ふ神に向ては何を以て之に答へんとする乎汝何故に審判の日の爲に勉めて準備せざるか此日に於ては人に辯護を托すること能は

第二十四章 審判と罪人の刑苦

け蓋し人々皆其負ふ所の荷重ければなり今は汝の勞
 苦に益あり又其涕も受け入れられ悲號も聞かれ汝の
 悲歎は罪を消滅するの力あり
 夫れ他人より虐待を受くるも己が爲に之を怨恨せず
 却て其人の惡の爲に悲み己を責むるものを快く祈り
 誠心より彼等の罪を恕し己の過失を謝するに疾く怒
 を發するより憐みを起すこと速にして屢己を強ひ
 身軀擧げて靈に服する耐忍深きもの爲には是れ大
 一 且有益なる練罪所なり

後の清稜を受んとして其罪を保つは今罪を清め惡を
 去るの善きに如かざるなり實に我等は濫りに肉を愛
 するが爲に自ら欺くものとなれり彼の刑火の薪とな
 るものは汝の罪の外又何物かあらんや故に汝今自ら
 の辛苦を厭ふて肉に従ふこと多ければ後ち汝の罰せ
 らるゝことも益重く恰も刑火の爲に其薪炭を蓄ふる
 が如し

(二) 抑人の犯せる罪は偶此れが刑具となるなり惰夫
 は熟鋸を以て刺され貪食者は無上の飢渴を以て責ら

れ奢侈放蕩の者は燃ゆる歴青と臭き硫黄の中に浴し
嫉妬の者は狂犬の如く悲號すべし夫れ罪として相應
の苦楚之に伴はざるものなし高慢の者は耻辱の中に
入り貪慾の者は苦しき貧究を以て責めらるべし
彼所に於て一時間の苦楚は此世に於て百年の最も劇
しき痛悔よりも重し此世に於ては労働の休憩友人の
慰藉を受くるも罰せられたるものゝ爲には安息慰勞
あることなし
今汝罪の爲に憂慮すべし是れ裁判の日に恩恵された

る民と共に安全ならんが爲なり
此時に當りて義者は奮然として己を抑壓せし者に向
て立ち今謙りて人の裁判に服する者も彼の時は人を
裁判せんが爲に立ち貧賤の者は確き望を有し倨傲の
者は恐怖の中に圍まれん彼の時に到ては此世に在で
キリストの爲に輕蔑せられ愚なるを習ひし者は却て智者
なること現はるべし
彼時到来ば耐忍せし迫害は我等を喜ばしめ諸罪の目
は閉られ熱信の者は喜悅し神を恭敬せざる者は悲み

己を制せし者は奢を極めし者の喜びに優り襪履の服は耀き錦繡の衣は敝汚と變じ茅舎は却て金殿に勝り地上の諸權も耐忍の利には比することを得ず彼の時到来れば單純の從順は世の大智にも超越し純善の良心は哲理に通曉する喜びよりも大なり富を輕ずるの念は世の財寶よりも貴ばれ熱心の祈禱は美食に飽きしより慰藉を得ること多し多辨せんよりも靜默の方向喜ばしく許多の華言よりも潔行の利は多く世の歡樂は謹直の生涯嚴烈の痛悔の快に及ばざる

なり汝未來に於て劇しき苦痛より救はれんが爲め今僅少の苦痛に堪へ忍ぶことを習ひ未來に於て堪へ得る力を試みよ若し此世に於て僅少のことにも堪へざれば如何で克く彼の永久の苦痛に堪ふべけんや些々たる世の艱苦の爲に其忍耐を失はば若し地獄の火に逢ふときは果して如何ぞや此世に於て歡樂を擯にするごと未未來に於て基督と俱に王となることの二者は併せ得べからざるなり汝若し時瞬間に死せんには今日

まで維持せし名譽と快樂は何の益する所あらんや
 故に神を愛し惟之に仕事ることの外は皆虚事なり誠
 心より神を愛する者は其完全愛によりて惶懼なく神
 に接することを得るが故に死も刑罰も裁判も地獄も
 嘗て恐るゝことなきなり此に反し犯罪を甘ずるもの
 死と裁判を怖るゝは實に異むに足らざるなり若し
 愛に由りて完く罪を離るゝことを得ざるも地獄を恐
 るゝの心より罪に遠ざかることを得ば豈善からずや
 神を畏るゝことを忽諸にする者は善事を爲すも永續

することなく速く惡魔の罟中に陥るべし

第二十五章

熱心を以て一生の言行を改悛

する事(此章は特に修道者の爲に記する所なり)

一 警覺精意して神に仕事し又屢何の爲に世塵を拂ひて
 此修道院に來りしやと熱々考ふべし是實に生涯身を
 神に獻げて靈に屬する人とならんが爲にあらざるや然
 らば則ち汝靈の上達に於て頗る熱心なるべし蓋し遠
 からずして汝の勤勞の報酬を受くべければなや彼の
 時到らば汝の境界には最早恐懼と憂愁一もあること

なし汝宜しく今少しく働苦すべし然らば大なる安息
 則ち無究の喜びを得べし汝若し間斷なく善をなさん
 として信實熱心ならば神も亦汝に報ゆるに信實寛大
 なること固より疑ひあることなし汝勝利を得べき善
 き望は持べしと雖も決して安堵すべからず恐らく
 一は怠慢と驕傲に陥るの憂あらん
 (二) 或人嘗て憂ありて恐怖と希望の中に漂ひ時として悲
 哀の迫る所となり忽ち禮拜堂に入り謙遜りて祭壇の
 前に跪き祈りて後ち心に思らく若し我終結まで忍び

得るものなりと知らば如何に幸ならんと於是乎直
 に心の中に神の答へを聞けり曰く汝之を知らば何を
 爲さんと欲する乎知りたる後ち爲さんと欲する所は
 今爲すべし然らば汝即ち安然なるを得んと是に依て
 慰められ強められて全く神の旨に委せられたれば其淨茫
 の憂慮も熄み後來の方向は如何ならんと徒らに其心
 意を勞するを廢止て計の善業を始め之を成就せんに
 は神の全く且喜び給ふ旨意は如何なるかを悟らん爲
 力を盡したりとぞ

預言者曰く主を望みて善を行へ此國に止まれ然らば
 其富に養れんと
 多く人の善に進み熱心を以て過を改むるを阻害する
 ものは即ち難爲を恐るゝと悪と戦ふの勞苦是れなり
 然れども己の最も困難なること又反對なることに大
 丈夫の如く勝を得んと努むる者こそ他に優れて凡て
 の徳に最も能く進むことを得べし是れ人已に打克ち
 勞苦を以て己を制するにより能く上達することを得
 又大なる神恩を得べければなり然れども凡ての人其

己に克ち且悪を死せしむるに於て各の量相等しから
 ずされど多くの情慾ある人も熱心努むる時は徳を進
 むる熱心なき温和の人に勝りて利を得ること多かる
 べし

特に我等の行を矯正するを裨補するもの二あり即ち
 天性溺れ易き惡業より強ひて身を遠くすること及び資
 性特に缺ぐ所の美德を熱心に求むる事是なり
 又他人の爲す所を見て常に不快を覺ゆる事は汝に於
 ても之を慎み之を除く事を勉むべし

汝何所に在るも己が靈魂を益すべきものは之を集攬せよ若し善き龜鑑を見聞する時は努めて之に模倣せんことを勵むべし又之に反して責むべき所を見れば汝避けて之を爲さざることを慎むべし而して若し之を行ひしことあらば速に其過誤を矯正することを勉むべし汝の眼常に人を觀察する如く汝も亦同じく他の注視を受くべし

心を熱く且専らにし禮義ありて能く規律を遵守する兄弟を見れば何如に快く且樂しき乎又放縱にして秩序

なく爲に召されたる勤を爲さざる者を見れば如何に悲しく且憂ふべき乎夫れ其職務の善き志を棄て命を受けざる事に傾向するは此れ實に有害なる事にあらずや

(三) 汝既に立てたる志を覺ゆて常に汝の眠の眼前に十字架に釘けられたる基督を仰ぎ見るべし汝基督の言行を見れば實に耻づべき事多かるべし汝永く神の道を歩行とも尙未だ基督を模擬することを勤めざるが故なり熱心を以て主の最も聖なる生涯の言行及び其

苦死を考慮する修道者は此に由りて多く己に必要利益あるものを見出し耶蘇の外他に善きものを探討るの要なきを知らん嗚呼若し十字架に釣られ給ひし耶蘇我等の心に来り給はし我等は如何に速く完全なる學者となり得べきぞ

熱心なる修道者は已に命せられたるものを諾し凡てよく之を負担せり然れども輕忽冷淡なる者は多くの苦難を有し全く苦痛を以て圍まるべし是れ内心の安慰を欲ぎ又外部の快樂は之を求むることを禁せらる

よが故なり其規律を遵守せざる修道者は其靈魂滅亡に近く規律の寛裕を求むる者は常に煩悶の中に在るべし蓋し是れ種々の事に就て常に不快を覺ゆればなり

然るに嚴重の規律に繋がるゝ多くの他の修道者は如何ぞや彼等は外出すること稀にして静閑に在るを常とし其衣食は尤も麤にして労働は非常に多く又發言すること僅かにして夙に起き夜半に寝ね永き祈禱を爲して止まず屢書を讀み總ての規律を嚴格に遵守せ

又他の修道院に在る兄弟姉妹の實況を見よ彼等は
毎夕起ちて主の前に讚美をなせり然れば此の如き多
くの修道者の神の前に讚美を始むる時に至り汝獨
此清き働きを怠るは耻づべきにあらずや
嗚呼我等は常に口と全心を以て主なる神を讚美する
の外他の爲すべきものなければ喜ばしきものを嗚呼
飲食睡眠を要せず常に神を讚美し惟靈の要務にのみ
身を盡すことを得ば善かりしならん若し斯の如くな
ることを得ば多く日用必需のために肉身に使役せら

る、今よりは一層の幸福なるべし嗚呼彼の身に必要
の物なくして今唯稀に味ふ所の靈に属ける快樂のみ
を有せば無上の幸福ならん
人若し受造物よりして其樂を求むることなきに至ら
ば全く神の恩恵を味ふことを始むべし其時に至れば
如何なること起るも皆満足すべく其富饒に向ふも喜
ばず又貧困に迫るも敢て悲まず眞實を以て全く神に
委託し凡ての物の上に神を主たらしむべし神の前に
は亡ぶるものなく死するものなく唯凡ての物は神の

ハ哥前十
五〇廿
ニ路廿〇
三八〇
一黙四〇十

爲に生き猶豫なく其指點に従ふなり
 汝常に命終を記臆し又既に徒消したる時日の歸り來
 らざることを思考せよ注意勉強なくして決して徳に
 達すること能はず汝若し冷淡ならんことを始むれば
 即ち惡たらんことを始むるなり然れども汝寔に熱心
 ならば大なる平和を得て神恩と徳を慕ふにより勞苦
 を感ずることを減少すべし熱心勉強なる人は凡ての
 事の準備を爲せり
 惡習と情慾を拒ぐことは流汗して身軀を勞働するこ

とよりは重き働さなり最も僅少なる過ちを除かざる
 者は漸次大なる過ちに陥るべし若し汝日中を利益に
 過さば夕に於て常に喜びあらん自らを守り自らを勵
 まし自らを戒めて他人の爲になす所あるも決して自
 らを忽諾にすべからず汝強ひて己を制すれば其量に
 従ひ倍靈の上達することあらん
 アーメン

ざるなり汝もし心裡に基督の爲に壯麗なる館弟を設
 ければ主は汝に來りて其慰藉を現はし給はん基督の榮
 光と美麗とは悉く心裡にあり主は則ち是に於て自ら
 悦び給へり主は屢人の心裡を訪ひこれと共に樂し
 き談話をなし快き慰藉を與へ平安を篤くし又極めて
 異常なる親睦を示し給ふ
 忠信なる魂よ汝心を備へて此新郎の汝に來り汝の
 裡に住み給はんことを望むべし主は斯く云ひ給へり
 曰く若し人われを愛せば我言をも守らん且我等來り

て彼と共に住處べしと
 此故に心扉を開きて基督を迎へ他のものは皆拒絶し
 て之に入らしむることなかれ基督もし汝に在す時は
 汝富て乏しき所なし基督は諸ての事に於て汝の爲忠
 實に警戒し將來の準備を爲さしめ遂に人に倚頼する
 の必要なからしめ給はん蓋人は迅速に變遷し挫滅す
 るものなれども基督は永遠に存在して究竟に至るま
 で確乎に我等を助け給へばなり孱弱必滅の人は假令
 汝に有益親近なるも之を頼みとなすべきにあらず又

五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

第一章 内心の生活を懐むべき事
 三三三

彼往々汝に妨碍し抗敵することあるも深く之を怨恨
 とすべきに非ず今日は汝の味方たるもの明日は翻り
 て仇讐となり又屢風の如く旋轉することあらん
 (二) 汝萬事を神に託して彼を畏れ彼を愛せよ神は汝の爲
 に辨護し萬事汝の爲に最良なる益とならしめ給はん
 汝この地上に於て常に保つべき城邑なし汝那邊に在
 るとも羈客回國者なれば若し最も深密に基督に結合
 せざれば曾て安息を得るの時あらざるべし此土は汝
 の憩息の處にあらざるに何故に四方を望み見るや汝

の住所は天に在りと定め地上の事物は皆路傍のもの
 如くに看過すべきなり萬物皆逝過し汝も亦之に伴
 ふ慎て之に纏綿すること勿れ恐らくは汝捉へられ且
 亡びん汝須らく最高者を念ひ間斷なく基督に祈請し
 て其憐恤を仰ぐべし
 汝もし高尚なる天上の事物を鑒諒すること能はずん
 ば宜しく基督の苦楚を顧念ひ欣然として其聖き瘡痕
 の中に憩息すべしそは汝若し信心を以て主耶穌の瘡
 痕と其尊き痕班の中に逃るれば患難の時に當て大な

第一章 内心の生活を懐むべき事
 三三三

る安慰を感じ人の侮辱を意とせず又讒誣の言を忍ぶ
 こと易ければなり基督も世に在せしとき人に侮られ
 最大なる究迫に陥り其親明知友にすてられ讒誣の裡
 に立給ひたり基督は苦楚凌辱を甘受し給ひたり然る
 に汝は敢て人を怨まんとする乎基督には譬敵讒者あ
 り然るに汝は人をして悉く己か知友恩人たらしめん
 と欲するか汝もし患難に遭遇せずんば如何にして忍
 耐の賞報なる冠冕を得べけんや
 もし意に逆ふものを耐忍を欲せざれば争で基督の知

友たることを得んや汝若し基督と俱に王たらんと欲
 せば須らく基督と俱に悩み基督の爲に苦を嘗むべき
 なり汝もし唯一たび主耶穌の奥義に達し其切愛の少
 量をも味ふ時は自己の苦樂を顧みずして反て讒誣を
 蒙るを悦ぶに至るべしそは耶穌を愛せば人自ら己を
 卑しむるの念を生ずればなり
 耶穌と眞理を深く愛し眞正なる信徒にして過度なる
 情慾を脱却したるものは自由に己を神に歸すること
 を得且靈によりて己に克ち欣喜を以て安息に居ん

世の談論評説に拘泥せずして萬事を其真相の儘に判定するものは眞の智者にして是れ教を人に受ず寧ろ神に受けたるものなり其獨を慎み外物を輕んじ得るものは修道實行の爲に所を要し或は時を待ことなし彼の靈に屬するものは己を憶ふこと速かなり是れ彼が常に全心を外物に傾けざるに因る彼は時に臨みて止を得ず服すべき外物の勞働勤務の爲に碍けらるることなく却て事の生じ來るに従ひ適宜に身を以て之は當る衷心能く整頓し平定したる者は他人の奇異悖

逆なる行爲を意とすることなし人は外物を己に近付ること彌多ければ困扼と迷惑に遭ふことも亦愈多し
 汝若し方正にして全く罪惡より離れ清潔なる者ならんには萬物皆汝の益となり又汝の進歩を助くるものとならん然れども多くの事汝の意に適せず毎時累厄となる所以は蓋し汝が未だ全く自己を撲滅せず又總て地上の事物より離隔せざるが故なり人心を汚し且之を惑はすもの受造物に對する不潔なる愛より甚し

さるものはなし汝もし外部の安慰を退くる時は能く天
上の事物を黙想するを得且まばく内心の歡喜を享
ることを得べし

第二章 心を卑くして服従すべき事

(一) 誰か汝に與し及誰か汝に敵するやを深く顧慮するこ
となく惟慎で汝が爲す所の總ての事に於て神なん
ぢと共に在さんことを求むべし良心の可とする所に
從へ然らば神は能く汝を護り給はん蓋神の助け給ふ
ものは人之に敵意あるも之を害すること能はざれば

イ羅八〇
三六
三〇

口出十四
〇十三

なり汝もし黙して苦しむことを得ば必ず主のなんぢ
を助け給ふことを見るべし主は汝を救ふの時と法と
を知り給ふ故に汝は己を主に托すべきなり夫れ助る
と總ての恥より救ふとは神の爲し給ふ所なり
我ら己の過失を人に知られて之を非難さるゝは我儕
が層一層謙遜に進む爲に屢大なる益となるなり人
もし己が失敗の爲に自ら遜る時は他人と和ぐこと
易く又他人の憤を解くことも速かなり
(二) 神は謙遜者を保護し之を拯ひ謙遜者を愛し之を慰め

六雅四〇

第二章 心を卑くして服従すべき事

一たまふ神は謙遜者に己を傾け謙遜者に大なる寵恩を
 與へ其謙遜の後に榮光の位に昇らしめたまふ謙遜者
 に奥義を啓示し懇切に之を己に招引し給ふ也謙遜者
 は假令凌辱に罹るとも尙充分の安康を維持すこれ世
 を頼まずして神を頼めばなり
 汝もし我は總てのものの中に於て最も劣れるものなり
 と自ら感ずるに至らざれば何等の進歩をもなしたり
 と思ふことなかれ

第三章 善良温和なる人の事

(一) 汝先自ら平和を持せよ然らば他を融和かしむるこ
 とを得ん温和なる者は博學なる者よりも多くの益を
 起す短氣なる者は善をも悪となし容易く風説の悪言
 を信ず温和善良なる者は萬事を化して福利となす平
 和なる者は何人をも疑はず然れども不平憂鬱のもの
 は種々の猜疑あるが爲に惱され自ら静閑ならず又人
 をも静閑ならしめず屢いふべからざる事を口にし爲
 すべきことをも爲さず他人の爲すべし事を顧みて却
 て自ら爲すべし事を怠るなり

第三章 善良温和なる人の事

是故に汝先注意して己が事の爲に熱心を彰せ然る後
 なんぢ正當に隣人の利害の爲に熱心なることを彰は
 し得べし汝は能く己の所行を辨解し裝飾することを
 知る然れども他人の分疏を受け容るゝことを憚ばず
 なんぢ寧ろ己を責て汝の兄弟を恕すは更に正當なら
 ん汝もし人に容れられんと欲せば汝も亦人を容るべ
 し

(二) 看よ汝なは眞の愛と謙遜より離るゝこと如何に遠き
 ぞや夫れ此徳に達せし者は唯己に對するの外何人に

對しても怒ることを知らず善良柔和の士と交ること
 豈難事ならんや何となれば斯る交際は萬人の喜ぶ所
 にして人は皆平和を歡喜とし又己に合意する者を深
 く愛すればなり之に反して頑陋專恣なるもの或は放
 逸なる者或は己を逆待するものと共に平穩に棲むこ
 とを得るはこれ大なる天與の賜にして最も稱揚すべ
 き丈夫の所爲と云ふべし

(三) 或は自ら平和の中に居り亦他人と平和の中に居るも
 のあり或は自らも平和の中に居らず亦他人をも平和

の中に居らしめざるものあり斯る人は他人の厄累と
 なるのみならず常に自己の厄累となること更に甚し
 又自ら平和の中に居りて他人をも平和に復らしめん
 と勉むるものあり

然れども此悲惨なる人生に於て我等の完全なる平安
 は艱難を感ぜざることよりも寧ろ遜りて忍耐するの
 點に於て存す能く忍耐することを知るものは亦能く
 己を平安に保たんと是則ち己に克ものにして世界の長
 基督の友天國の嫡嗣なり

第四章 心情を清潔にし意向を純正にすべ

と事

(一) 一人の地上の事物を離れて其上に飛翔するは兩翼によ
 る其兩翼とは則ち純正と清潔なり純正は我儕の意向
 中に存し清潔は我等の心情中に存せざるべからず純
 正なる意向は神に向ひ清潔なる心情は神を認め神を
 喜ぶ

(二) 汝若し衷心に過度の慾情を離るれば善良なる作用は
 一として汝を碍ることなからん若し汝の願ひ求る

所た神の聖意と隣人の福利ならば汝心に全たき自由を得べし

汝の心もし誠實ならば受造物みな汝の爲に生命の鏡となり又聖教の書となるべし蓋如何に微小にして卑しき受造物と雖も神の聖徳を彰はさるものなればなり汝の心若し善良純潔ならば阻障なく明かに萬物を理會することを得べし純潔の心は天國と地獄を貫くなり

凡て人は其心の状態に従ふて外物を判定す若し世に

喜樂あらば之を取得するものは必ず純潔なる心の人なり又禍難あらば良心の穩ならざるもの最も善く之を知る

火中に投せられたる鐵は其銹を去り全然熱して赤くなるが如く人も全く自己を神に歸する時は悉く怠惰の念を脱し化せられて新人となるなり人もし其心を冷却し始むる時は微々たる勞苦も之を厭ひ喜んで外部の事物より安慰を受く然れども一朝にして全く己に克ちて凜然神の途を歩み始むるときは前に難しと

なしたる事をも意とせざるに至るなり

第五章 自己を熟察すべき事

イ耶十七
五

(一) 吾人は深く自己を恃とすること能はず何となれば
 屢神恩に乏しく又聰明を缺ぐことあればなり
 吾人に存する光明は甚微にして動もすれば之をも
 怠慢によりて失ふことあり吾人は往々己が心の如何
 ばかり暗さを認識することなく屢回罪惡を犯し之
 を分疏して却て其罪を増すことあり又時としては情
 の爲に驅られたるを誤認して之を熱心となし他人の

五
口太七〇

細瑾を誹難して却て自己の大罪を黙過し他人の手よ
 り蒙る損害は直に之を感じて打算すれども吾人が他
 人に與ふる損害は更に之を意とせざるなり自己の働
 を審密公平に省察するものは他人を酷評するの理由
 殆ど是れなきことを知らん

ハ太十六
〇二六

(二) 靈に屬する人は凡て他の憂慮を捨て自己を顧るこ
 とを可とす又勉めて自己に注意するものは他人の事
 に就て沈黙すること難しとせず汝もし他人の事に就
 て沈黙し特に己を反省るに非ざれば決して靈に屬す

第五章 自己を熟察すべき事

敬虔者となること能はず汝もし只管神と己とに注
意せば外部に於て如何なるものを目撃するとも是が
爲に殆ど動かさるゝことなかるべし

二若し汝の心なんぢに在ざれば汝の在る所は奈邊ぞや
汝萬事を歴覽するとも若し自ら忽にせば何の益す
る所あらんや汝若し心意の平安と志謀の合一とを願
望せば尙萬事を抛棄して専ら己を省るべし汝尙し
總て俗世の憂慮より離るゝ時は汝の上達すること大
ならん然れども若し何にても俗世の事物を尊重せば

甚しき退退を來すべし

(三) 汝は只神と神に屬するものゝ外は如何なる物をも皆
尊むことなく高しとすることなく樂しとすることな
く又容るゝに足るものとなすこと勿れ如何なる被造
物より享るとも其安逸は皆空なりと思ふべし神を愛
する魂は神に劣りたるものをば悉く蔑視す唯神のみ
永久に存して計りなく萬物に充滿するものなり神の
み靈魂の慰藉また心の眞正なる喜悅なり

第六章 責なき良心より生ずる喜悅の事

第六章 責なき良心より生ずる喜悅の事

イ哥後一
〇十二

(一)善人の誇るべき所は其良心恥るところなきを證する
にあり良心の可とする所に順へさらば汝恒に喜悦を
有すべし其良心責る所なき時は百難に堪へ災禍の時
も甚だ快活なるを得其良心疾しき所あれば常に怖
れて狼狽す

口約登三
〇三

汝もし其心に譴らるゝ所なければ快く憩ふことを得
べし汝善を行ひし時の外は決して喜ぶことなかれ罪
人は常に眞正の喜悦を有せず又心に平安を感ずること
となし主曰たまはく「悪む者には平安あることなし」

ハ賽四八
〇三二

二撒前五
〇・二三
ホ米三〇
十一

へ詩百四
六〇四

ト羅五〇
三

チ加六〇
十四
り約五〇
四一四四

と
假令彼等は「我等は無事なり災禍われらに降らじ何
者か敢て我等を害せんや」と云ふとも之を信するこ
と勿れ蓋神の怒は俄然に起り彼等の所業は烏有に歸
し彼等の思想は滅ぶべければなり
患難に誇ることば愛を懷くものには難事にあらず蓋
其誇るは主の十字架を以て誇るなればなり人より授
けする所の光榮は永續せず世の光榮には憂愁常に伴
隨す

四一四〇
四一四〇
六〇四
十一
〇二〇
二〇三〇

(二) 善良なる人の榮譽とする所は人の口舌にあらざして
自己の良心にあり正義なる人の喜悅は神より出でま
た神にあり其喜悅は眞理によれるものなり眞正にし
て無究の光榮を慕ふ者は塵世の光榮を顧みず塵世の
光榮を求め或は其心より蔑視せざる者は天上の光榮
を尙まざることを自表するなり
人の毀譽褒貶を意とせざる者は心中大に平穩なるも
のなり其良心純潔なるものは満足融和すること速
なり汝人に讃らるゝも聖を増すにあらざ又誇らるゝ

又母前十
六〇七

〇二〇
〇三〇

一も徳を減ずるにあらざ汝の尊卑は汝の眞狀如何にあ
り人言を以て汝を神の觀たまふ所より寸毫も尊くす
ること能はず
汝もし己が眞狀如何を反省せば人の褒貶を意とせざ
るべし人は外貌を觀れども神は内心を深く觀たまふ
人は行爲を察すれども神は意向を衡りたまふなり
常に善を行ふて己を尊まざるは其心謙遜なる記號な
り如何なる受造物よりも慰藉を享ることを好まざる
は是れ心中大なる純潔にして確信ある微標なりもし